

鈴木 はい。じゃあ、ちょっと始めさせていただきます。

芦刈 はい。

鈴木 えっと、ちょっとまた、前回、聞き忘れてしまったところから、お聞きしたいんですけども。

芦刈 はい。

鈴木 えっと、あ、あと、あの、すいません。あの、海老原さんの講演会の、あの、資料を、あの、送らせてもらったんですけど。

芦刈 ああ、はい。

鈴木 あれ、たまたま Google で見つけたんですが、あのときの、あの、文章って、た、もしも、あなたが、いつ、あ、障害や病気のために、えー、体が動かなくなったら、どんな人生を想像しますか、みたいな文章が書いてあったんですけど、あれって芦刈さんたちが考えたんですか。

芦刈 うん、いや、多分、違うんじゃないかな。ど、どうやったかな。多分、僕たち、僕じゃないですね。

鈴木 ああ、そうですか。

芦刈 はい。

鈴木 あの、チラシって、どなたが作ったんですか、あれ。

芦刈 チラシは、ちょっと覚えてない。ど、どんなやつだったっけ？

鈴木 あのー、じ、JIL ですかね。あのー、今、ちょっと画面共有すると、こんな。見えます？

芦刈 ああ。じゃあ、これ、僕が作りました。

鈴木 ああ、やっぱり。この真ん中にある文章って、あ、だ、あ、芦刈さんたちが作ったわ

けじゃないんですね？

芦刈 それは、もう、あの一、この映画の言葉ですね。うん。

鈴木 ああ、なるほど。

芦刈 うん。

鈴木 でも、このレイアウトとかを芦刈さんが作ったっていうことですか。

芦刈 僕は、この上の上映会っていうところの文字と、下の日時を入れただけなんで。

鈴木 ああ、なるほど、なるほど。

芦刈 ポスター取ってきて、リハビリ的な感じなんで。

鈴木 ああ、なるほどね。はい、はい、はい。

芦刈 ここの上の文章は全部、ポスターの。

鈴木 ああ、分かりました。

芦刈 うん。はい。

鈴木 この、えっと、なんか、『上映実行委員会』って書いてあって、これ、全国の JIL が協議会、あ、JIL 生活センター協議会内になってるんですけど、JIL が協力してくれたんですかね？

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ、なるほど。

芦刈 病院とかで上映するときに、海老原さんの、あの一、よ、用紙とか、映画のお金とか、全部、負担してくれて。

鈴木 あ、そうですか。

芦刈 うん、はい。

鈴木 なるほどね。この JIL とのつながりって、どういうふうにできたんですか。

芦刈 これは、要は、その、海老原さんを呼びたいっていう話で。

鈴木 はい。

芦刈 これは、あの一、これの、あの、ホームページがあって、そこに申し込みみたいにするところがあって、そこで連絡を取った感じです。

鈴木 あ、なるほど、なるほど。分かりました。

芦刈 はい。

鈴木 はあ、はあ。で、えっと。で、その後の、あの一、えび、海老原さんと交流があったってということですよ？

芦刈 そうですね。

鈴木 はい、はい。で、あとは、あの一、えっと、退院された後に支援をしてくれる介助者の人と、あの、全て面談されてますか、全員の方と。

芦刈 ほぼ、ほぼ、してます。

鈴木 あ、Zoom で？

芦刈 Zoom です、全部。

鈴木 なんか、オシキリさんが言ってたのが、なんか、あの一、1時間ほど面談することがあったっていうふうに言ってたんですけど。結構、時間、長く話されたんですか。

芦刈 そうですね、1時間ぐらい。うん。長いときは1時間半ぐらい。

鈴木 あ、一人一人と？

芦刈 そうですね。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。1人、ちょっと、あの一、できなかつたんですけど。

鈴木 はい、はい。

芦刈 うん。あとは、もう、ほぼ、できてるんで。

鈴木 どんな話をされたんですか。

芦刈 いや、もう、普通の、普通のっていうか、僕が入院したときからの今まで話とか。

鈴木 はあ、はあ、はあ。

芦刈 まあ、自立して、まあ、やりたいことみたいな。

鈴木 ふうん。

芦刈 そう、年代が近い人が多くて。

鈴木 はい、はい。

芦刈 なんか、妙に気が合った人とは、うん、いろ、いろんな世間話もしながら。

鈴木 なるほど、なるほど。

芦刈 はい。

鈴木 じゃあ、もう、相手の、なんか、趣味だとか、なんか、そういうことも聞いたりとか。

芦刈 そうですね。ちょっと聞いたりもしました。

鈴木 へえ。じゃあ、なんか、介助の方法とか、そういうことじゃなくて、もっと、なんか、

一般的な。

芦刈 そうですね。介助の方法は、あの一、マニュアル、作ってるんで。

鈴木 ああ、はい。

芦刈 で、見る、見てもらう感じで。

鈴木 ふうん。

芦刈 うん。もう、そのときは、本当に面談だけで。

鈴木 なるほど。

芦刈 で、次に、一応、介助研修も入れてたんですけど、最近、僕が全然、忙しくて参加できなくて、オシキリ君が代わりにやってくれてるんです。

鈴木 あ、なるほど、なるほど。あの、やっぱり、そうやって面談をされたほうが安心しますか。

芦刈 やっぱり、いきなり初めての人よりは、面談したほうがいいかなと思うんですけど。

鈴木 うん、なるほどね。

芦刈 実際、会うのは、でも初めてになるんで。

鈴木 はい、はい、はい。

芦刈 うん。リモートでしか、ちょっと話してないので。

鈴木 ああ。でも、まあ、リモートでも、やっぱり、は、話したほうがいいっていう。

芦刈 そうですね。少しでも知ってたほうが。うん。

鈴木 あと、あの一、えっと、まあ、自立生活プログラムみたいな形で、まあ、オシキリさんが、結構、まあ、担当としてやってらっしゃったと思うんですけど、他にもいろんな、こ

の、全国の当事者の人が芦刈さんの支援っていうか、なんか、いろいろ、お話しされたりとか、支援されてきたじゃないですか。

芦刈 うん。はい、はい。

鈴木 あのー、そういうふうに、なんか、1人の担当者じゃなくて、いろんな複数の人に関わったほうが、がいいとか、そういうことってありますか。

芦刈 ああ、やっぱり、そのー、オシキリ君も頑張ってくれてるんですけど、一応、まあ、呼吸器、実際、着けてないじゃないですか。けん、病気も、あのー、違うし。違う、こう、病気名っていう感じで、やっぱり、あのー、同じ境遇っていうか、呼吸器、着けてて、まあ、筋ジスの人とかの話は聞きたいなと思ってたので、それは、よかったかなと思って。

鈴木 やっぱり、こう、いろんな複数の人から話を聞くっていうことは、お、おっきいですか。

芦刈 そうですね。1人の人だと、その人の考えだけになるんですけど、人によって全然、まあ、性格、違うっていうか、うん、なんで、いろいろ聞けたほうが参考にはなるのかな。

鈴木 なるほどね。あのー、なん、なんですかね、あとは、そのー、えっと、相談支援事業所って病院の外にあるって、おっしゃってたじゃないですか。

芦刈 はい。

鈴木 その名前って、メロディーっていう事業所ですか。

芦刈 そうです。

鈴木 それ、あの、別府若葉会っていう名前の法人ですか。

芦刈 うん。確か、そうだったと思います。

鈴木 あ、なんか、ちょっと調べたんですけど、就労支援A型、B型事業所って書いてあったんですけど、メロディーって。

芦刈 ああ、うん。それもやっています。

鈴木 ああ、それもやってる。でも相談支援事業もやってるってということなんですか？

芦刈 はい、そうです。

鈴木 あ。で、この相談支援専門員の方って、オシキリさん、おっしゃってたのが、その、以前、療育指導室の職員されてたっていうふうに言ってたんですけど。

芦刈 はい、はい。

鈴木 で、なんか、オシキリさんに聞くと、なんか、別府市の職員をされてたっていう話も聞いたんですけど、そうなんですか。

芦刈 いや、それはしてないんじゃないかな。

鈴木 あ、それはしてない。

芦刈 もともと、あの一、カウンセリングとかの免許も取ってるので、その仕事はやってたかも。そうです。別府では、やってないんじゃないかな。

鈴木 行政のことは、じゃあ、やってないってということなんですか？

芦刈 そうですね。

鈴木 で、あの一、西別府病院、長かったんですか、その方って。

芦刈 どれぐらいだろう。10年はおったかな。

鈴木 ああ。結構、長いですね。

芦刈 あの、新卒のときからなので、うちの病棟に。

鈴木 あ、なるほど。

芦刈 うん。

鈴木 で、10年いて、その後、若葉会に行ったってということなんですか？

芦刈 あのー、奥さんの旦那さんが、そこをやる、立ち上げてやってる人で。それで、そのまま、そこに入れてもらったっていう感じみたいです。

鈴木 あ、という、ということは、その方、女性の方ってということですか？

芦刈 いや、男性です。

鈴木 ああ、ごめんなさい。あの、あ、相談支援の？

芦刈 うん、男性の人。

鈴木 あ、男性の人。

芦刈 うん。

鈴木 で、奥さんがやってたってということですか。

芦刈 奥さんの旦那さん。違う、奥さんのお父さん。

鈴木 あ、奥さんのお父さんがやってらっしゃってたか。

芦刈 そう、そう、そう。そう、そう、そう。そう、そう。

鈴木 あ、なるほど、なるほど。えっと、ごめんなさい、えっと、じゃあ、もう一度、確認すると、その、あ、なるほど、だん、男性の方が、その相談支援専門員で、その方の奥さんのお父さんがやってる事業所なんですか？

芦刈 そう、そう、そう。うん。

鈴木 あ、そういうつながりですか。

芦刈 奥さんは西別府病院で働いています。

鈴木 あ、奥さんは西別府病院で働いてるんですね？

芦刈 はい。

鈴木 なるほどね。はい、はい、はい。なるほど。

芦刈 うん。

鈴木 で、えっと、まあ、その男性の相談支援専門員の方に、もう、結構、じゃあ、長らく、サービス等利用計画を作ってもらってたんですね？

芦刈 そうですね。もう、あの一、これ、始まったときから、お願いして。うん。

鈴木 はあ、はあ、はあ、はあ。

芦刈 そこは自分で選べたので、自分で選んで。

鈴木 はい。

芦刈 臼杵、あの一、臼杵市の人じゃなくて、僕をよく知ってる人がいいだろうっていうことで。

鈴木 はあ、はあ、はあ、なるほどね。

芦刈 はい、うん。

鈴木 あ、そこっていうのは、あ、そのメロディーですか。

芦刈 そうですね。

鈴木 へえ。

芦刈 そこ、うん。

鈴木 じゃあ、相談支援専門員の人を選ぶことができたんですね？

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ。結構、それ、珍しいんですか。

芦刈 いや、だい、いや、選べるんじゃないですかね。

鈴木 ふうん。

芦刈 地元の人を選ぶ人が多いんですけど。

鈴木 はい。

芦刈 うん。多くは、やっぱり。で、あの、別府のほうがいいだろうと思って。

鈴木 ああ。じゃあ、何人か、いらっしゃるってことなんですね？

芦刈 ああ、あの一、県内に、ふた、あ、何か所も、そういう所があって、選べる人、いっぱい、おる、いるんで。

鈴木 うん、うん、うん。

芦刈 うん。地元でも知ってる人は、いたんですけど、まあ、僕のことに関しては、その人のほうが詳しいので、お願いした感じです。

鈴木 あ、なるほど。あの一、ただ、当初は、その方って、重度訪問介護とか自立生活のことについて、お話しされてないんですよ？

芦刈 ああ、まだ、その頃は伝えてなかったっていつて。

鈴木 ああ。じゃあ・・・。

芦刈 うちのほうも。うん。

鈴木 ええ。

芦刈 うん。

鈴木 ただ、重度訪問介護のヘルパーを使うようになったときに、それを、手伝いとかもしてくれてってということですか。

芦刈 まあ、その一、要請、言って、時間数、取ってもらって。

鈴木 ああ、その方に。

芦刈 うん。で、そういう交渉もしてもらいました。

鈴木 なるほど。

芦刈 うん。

鈴木 ただ、その前については、その人から、なんか、重度訪問介護についての情報を提供してもらってということにはなかったんですね？

芦刈 そうですね。入院してから使えなかったし。

鈴木 なるほど。

芦刈 うん。

鈴木 あるいは、退院して、そういうことができるとか、そういうことも？

芦刈 ああ、僕も、それ、考えてなかったの。

鈴木 あ、なるほど。

芦刈 別に聞いたこともないので、向こうも言わない感じですね。

鈴木 その方って、重度訪問介護の自立生活のことって知っている方だったです、でしたか。

芦刈 ああ。それは勉強してると思いますけど。

鈴木 あ、なるほど、なるほど。

芦刈 はい、はい。

鈴木 じゃあ、ある程度、理解があったってということですね？

芦刈 そうですね。

鈴木 あ。あと、あの一、前に、ちょっとおっしゃってたのが、その一、引っ越しをさせるときの荷物の、その一、引っ越しって、友人の方がお手伝いしてくれるっておっしゃってたじゃないですか。

芦刈 はい、はい。

鈴木 もう既に荷物を運んでるんですか、ある程度は。

芦刈 もう既に運んでるのもある、あるし、当日に、あの一、はこ、テレビとかエアマットとかは当日じゃないと運べないので、だから、それ、当日、来てもらう感じです。

鈴木 なるほど、なるほど。

芦刈 はい。

鈴木 あの一、この友人の方って、あの、ど、どういう、あの、お付き合いをされてる友人なんですか。

芦刈 まあ、その息子さんが同じ、僕と同じ筋ジスで、高校の3年間だけ、うちの病院に入院したんですけど、その、中学校のときに、あの一、養護学校が、地元の所は知的の養護学校しかなくて、けど、勉強したいけんって行って、どうしようかってときに、僕の相談してきた人で。僕は、取りあえず、ここの、が、病院にいて、まあ、そっからね、学校、通ってみたらっていう話を、まあ、して、まあ、い、うちに入院することになって。ところが3年たって卒業して、それから、家、家に戻ったんですけど、なんか、体調、悪くなって、もう、22のときに、ちょっと、もう、亡くなっちゃったんですよ。うん。で、それ以降、なんか、結構、まあ、連絡はずっと取ってて。で、いつだったかな。2018年ぐらいかな。か、19年か。あ、19年ぐらいか。ところが、以前、福岡に、あの一、筋ジスの全国大会があって、行くときに一緒に、あの一、く、夫婦で、あの、一緒に行ってくれたんですよ。とま、泊まり込みで研修に。

鈴木 あ、芦刈さんを介助するためにですか。

芦刈 そう、そう、そう。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。で。

鈴木 それ、あれ、協会ですか。協会の大会ですか。

芦刈 そう、そう。筋ジス協会。

鈴木 はい、はい、はい。

芦刈 全国大会で。

鈴木 じゃあ、そういう付き合いがあるってということなんですね？

芦刈 そうですね。それで、僕が、ちょっと医大に入院したときも、ずっと手伝いに来てくれたりしてくれたので。

鈴木 どこに入院したときですか。

芦刈 あ、医大です。

鈴木 あ、医大に。

芦刈 はい。うん。

鈴木 あ、そういうふうに、なんか、あの一、お手伝いなんかもされるんですね。

芦刈 あの一、お母さまがナースなんで。

鈴木 あ。

芦刈 うん。今、ナースは、やってないんですけど、けど、ナースの免許を持ってて、だか

ら、いろいろ助けてもらえる、もらえるんで。で、あの一、お父さまが大工さんで、いろいろ、棚とか、ちょっとカーテンレールとか付けてもらうのに、いろいろ、今、作ってもらってて、やってもらってる感じで。

鈴木 あ、新居のほうのを？

芦刈 そうです。

鈴木 へえ。え、ちなみに、それは、もう、ボランティアでやったださってるんですか。

芦刈 そうですね。

鈴木 はあ。

芦刈 まあ、お、お茶、お茶とか、まあ、昼食代ぐらい出すぐらいで。

鈴木 はあ。

芦刈 うん、うん。

鈴木 でも、やっぱり、そういうふうに友人というか、まあ、その、信頼、し、できる人が、こうやってサポートしてくれる、ひ、ことって、どう思います？

芦刈 いや、もう本当にありがたいと思います。うん。なかなか、ここまでしてくれる人もいないし。うん。

鈴木 これ、もし、こ、そういう方がいらっしやらなかった場合って、荷物の搬入って、どうされる予定だったんですか。

芦刈 まあ、その一、僕の友達にトラック借りてきてもらって、出してもらおうかなとも思ってたんですけど、その人が大工なんでトラックを持ってて、で、出して、出してあげるわ、言ってくれたんで、それに甘えた感じです。うん。

鈴木 でも、まあ、そ、そんな、いろんな方のサポートがあるって、すごいですね、やっぱり、芦刈さん。

芦刈 そうですね。なんか、こう、助けてくれる人が、結構、いてくれるんで助かります。

鈴木 やっぱり、そういう方、いらっしゃると、退院した後も安心じゃないですか。

芦刈 そうですね。うん。「何かあったら言って」っては、言ってくれてるので。

鈴木 じゃあ、皆さん、もう、応援してくれてるような感じなんですね。

芦刈 そうですね。

鈴木 はい、ありがとうございます。あの一、ちょっと、また、あの一、病院時代のこと、ちょっと、お話、聞きたいんですけども。

芦刈 はい。

鈴木 あの一、えっと、その、病室で植物を飼ったりとか、なんか、そういうことってできます？ 植木とかなんか。

芦刈 いやあ、病室内では、できないですかね。うん。

鈴木 植木も駄目ですか。

芦刈 植木とかも、やってないですね。あの、外から摘んできた花を飾ってる人はいますけど。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。部屋には、でも置いてない感じ。

鈴木 例えば、キンギョを飼うとか、そういうのもできないですか。

芦刈 あ、そういうのは、多分、できないと思います。

鈴木 ああ。

芦刈 結局、その一、面倒を見るのが職員になったら。

鈴木 なるほど。

芦刈 うん。

鈴木 あと、お金の管理とかって、どうされてます？

芦刈 ああ、みんな、自分で財布、持ってる人もいるんですけど、僕は、こっちに、ちょっと、お金、置いてなくて。

鈴木 ゼロですか。

芦刈 いるときに、うん、買ってきてもらうって感じにしてたんで。

鈴木 ああ。それ、もう昔から、そうですか。

芦刈 いや、昔は、自分で管理してて。

鈴木 はい。

芦刈 うん。自分で売店、行ったりもしてたんですよ。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。

鈴木 え、そ、それ、昔っていうのは、その一、い、い、いつぐらいまでですか。

芦刈 いつぐらいまでかな。20年前ぐらいは持ってたかな。

鈴木 あ、じゃあ、でも逆にいうと、20年、え、前から持ってないってことなんですね？ 20年。

芦刈 その一、お金を扱うのが、なんか、職員ができないとか言われて。

鈴木 いつですか、それは。

芦刈 それは、多分、20年も前じゃないと思うんですけど。

鈴木 はい。

芦刈 うん。普通に、もう、なんか、頼むのもあれなんでもって。こう、いるときは、いや、職員に頼むのもなあと。僕も、それなら、ちょっと、もう要るときだけで持ってきてもらおうかなっていう。

鈴木 え、え、え、ああ。

芦刈 まい、毎日、来てたんで。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。

鈴木 え、毎日、どなたがですか。

芦刈 彼女のほう。

鈴木 あ、彼女のほうね。

芦刈 はい。

鈴木 えっと、ごめんなさい。彼女のほうが持ってきてくれるわけですか、お金を。

芦刈 ああ、もう、取りあえず、お金、ちょっと、いくらか渡してて、まあ、それで、ちょっと、食べ物、買ってきてとか言って。うん。だから、もう、なん、何となく、自分で、ここ、置く、置いとくの、なんか、取られるのも嫌だしなと思って。気付いたらゼロ、全然、持ってないんで。

鈴木 ああ、なるほど。その、でも、お付き合いされる前のときって、どう、どうされてたんですか。

芦刈 は、自分で取ったりできてたので。

鈴木 ああ。

芦刈 自分で、ちょっと。年金は、全部、親が持ってたので、要る分だけもらって、それ、自分で出して、使ってた感じ。

鈴木 どのぐらいの現金を病室に置いといたんですか。

芦刈 まあ、でも、多くても1万円ぐらいですね。

鈴木 それは、なんか、金庫かなんかがあるんですか。

芦刈 まあ、一応、鍵付きの引き出しが付いてるので、そこに入れる感じです。だから、決して金銭管理ができないわけじゃなくて、僕、あの、じ、自治会で会計とかもしてたので、それで、ちゃんと自分では、できるんですけど。なんかもう、いろいろ、手、借りんとできなくなったので、結局、それで、今は、してない感じです。うん。

鈴木 あのー、手、手を借りなくて、できなくなったって、い、いつ頃、その、手が、こう、何ていうんですかね、う、動かなくなったりとかされたんですか。

芦刈 うーん、いつぐらいだろう。30前は、ぐらいまでは、まだ手が、ちょっと動いてたんで、うん、できてたけど。そのときは別に、自由に職員もやってくれたので。うん、うん。いろいろ厳しくなったの。

鈴木 えっと、いろいろ厳しくなったっていうのは、職員さんが、で、できないよっていうことになった。

芦刈 そう、そう、そう。そうです。

鈴木 それは、さ・・・。

芦刈 なんか、ずっと、あのー、お金がなくなったとか何とかって騒ぎになったことが、あ、あって。それから、もう、職員が、なんか、当たらないっていうことになった。

鈴木 それは、ちなみに30ぐらいのときなんですか。

芦刈 それは、多分、それぐらいから、うるさくなった気がします、しますね。

鈴木 ああ。ということは15年ぐらい前、2006年とか、そんなぐらいですかね？

芦刈 そうです。はっきり分かんないですけど、大体の感じで。そんな感じ、はい、はい。

鈴木 その頃、何か、そういう盗難事件みたいなのが起こったってということなんですか。

芦刈 うん。なんか、ちよくちよくあったみたいで。

鈴木 へえ。

芦刈 いや、本当に取ったかどうか、分らないですけど。

鈴木 ああ。

芦刈 ただ、その一、患者さんによっては、ちょっと精神的に。うん、ある人が、大体、お金のことを言い出すんで。うん、それだったのか、本当に盗まれたのか、よく分らないですけど。うん。

鈴木 でも、やっぱり、あの一、病室に置いておくと、なんか、取られるんじゃないかって、心配はありますか。

芦刈 まあ、一応、信頼してないわけじゃないですけど、まあ、いないと思うんですけど、一応、気にはなるかな。

鈴木 じゃあ、あの一、何ていうんですかね、ATMとか、そういうものって、病室、院内には、ないんですね？

芦刈 が、なくなったんですよ。

鈴木 かつては、あった？

芦刈 今年の最初の頃まで、あったんじゃないかな。

鈴木 えっと、それ、新病棟になってからですか、5階建ての。

芦刈 いや、病棟、もう、なった後です。だから、こと、今年の年初めぐらい。今年の、そうやな、4月とかに、なくなったんやないかな。

鈴木 そのATMっていうのは、北病棟のときもあったんですか。

芦刈 あの、北病棟っちゅうか、病棟じゃなくて、病院の玄関にあったわけ。

鈴木 ああ。

芦刈 正面玄関に。

鈴木 それ、もう昔からあったんですか、ATM。

芦刈 ああ、昔からありましたけど。

鈴木 患者さんも使えたんですね？

芦刈 うん。それで、職員と一緒に下ろしに行ったりしてました。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。

鈴木 え、それ、芦刈さんも、やったことありましたか、そういうことって。

芦刈 ありますよ、何回も。だから、昔は、銀行の人が来てくれてたんですよ。

鈴木 はい。

芦刈 そう。訪ねてきてくれて、よ、用事ないですかって言ってきて、振り込みとか頼んだりしてたんですけど、それも、今は、しなくなって、で、ATMもなくなっちゃったっていう感じです。

鈴木 ああ、なるほどね。

芦刈 で、なんか、下ろしたい人は、なんか、指導室に頼んで、なんか、あの一、事務の人が行ってくれるらしいです、下ろしに。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。

鈴木 え、それ、ちなみに、ATMがなくなった理由って何でしたっけ？

芦刈 ああ、それ、よく分からないですけど、銀行の都合じゃないですかね。

鈴木 あ。

芦刈 なんか、今、短縮、あ、短縮っていうか縮小、縮小で、店と、支店とかも、どんどん、なんか、閉めてる感じなんで。

鈴木 はい。

芦刈 うん。そこの、もう、言いなりなんです、もう。だから撤退したみたいです。うん。

鈴木 でも、まあ、通帳を、じゃあ、自分で持ってる患者さんもいらっしゃるってことなんですか。

芦刈 そうですね、うん。

鈴木 その人たちって、病室の中に管理してるんですか。

芦刈 そうですね。多分、鍵付きの所に入れてるか、自分で管理できないと、あの一、あの、ほら、代、代理人っていうか、うん、その方が全部、管理してるんで。うん。

鈴木 それは病院の中にいるんですか、そういう代理人の方っていうのは。

芦刈 いや、いや、自分で、し、指名するんじゃないんですかね。

鈴木 はあ、はあ、はあ。

芦刈 うん。

鈴木 まあ、後見人とか、そういう方が。

芦刈 そう、そう、後見人です。

鈴木 ですよ。

芦刈 ちょっと名前が出てこなかった。

鈴木 ああ、ああ。はあ、はあ。

芦刈 うん。あと、重心の人とかは、後見人さんが全部、持ってるので。

鈴木 まあ、その方は、でも病院の外の人ですよ？

芦刈 うん。

鈴木 はあ、はあ。

芦刈 だから、要るときは、ゆ、言って、も、持ってきてもらわないといけないんじゃない。

鈴木 あの、芦刈さんが今の時点で、その、銀行に行くことってありますか。

芦刈 いや、特には、ないですね。

鈴木 ああ。じゃあ、これから退院された後では、もう、自分で行く予定なんですか？

芦刈 そうですね。

鈴木 はあ、はあ、はあ。

芦刈 ちょっと信用金庫のやつを作らんといけないんで。

鈴木 はい。

芦刈 給料とかは、そっちに入るらしいので。

鈴木 ああ。

芦刈 それで、ちょっと僕が行かないと作れないので。

鈴木 ですよ。

芦刈 そう。今、それがあるんで、なかなか、銀行も、利用が、なかなか、できてなくて。

鈴木 ああ。

芦刈 だから、もう完全に自分名義に、あ、名義は持ってるんですけど、完全に、ちょっと、そこ、別府じゃないので、それも、そのうち、作り直そうかなとは思ってたところです。

鈴木 年金は、じゃあ、別なんですか？

芦刈 はい。今まで、ずっと親のほうに入ってたんで、やっと最近、自分のほうに落とすようにならしてもらって。

鈴木 その信用金庫ですか。

芦刈 いや、それは大分銀行です。はい。

鈴木 あ、じゃあ、もう、自分の銀行口座ってということなんですか。

芦刈 はい、そうです。

鈴木 あ、なるほど、なるほど。

芦刈 そっちに全部、移してもらったので。

鈴木 ああ。で、今、通帳は、あの一、親御さんが今でも持ってらっしゃる？

芦刈 いや、もう、通帳は、ずっと僕が持ってます。

鈴木 あ、それ、いつ頃、そう・・・。

芦刈 だから、僕が持つてる通帳に、切り、切り替えてもらって、お、お、お、落とせるように。うん。

鈴木 その、芦刈さんの持つてる通帳って、どなたが管理されてるんですか。

芦刈 いや、それ、僕が持つてて。だから、今、彼女が、ずっと持つてるってということなんですわね。

鈴木 あ、なるほど、なるほど。

芦刈 うん。

鈴木 それは・・・。

芦刈 そこから、い、いろいろ、今、買ってもらったりしてます。

鈴木 ああ、なるほどね。

芦刈 うん。

鈴木 その、びょう、あ、ごめんなさい、えっと、退院を決めてから、そうなったんですか。

芦刈 ああ、そう、年金は親に言って、やっと自分のほうに。

鈴木 はい。

芦刈 うん。なかなか、自分管理にさせてもらえなかったんで。

鈴木 ああ。

芦刈 それも、かなり時間がかかって、去年から言ってて。

鈴木 はい。

芦刈 で、なんか、一回、向こうの、あ、し、あ、向こうに来たお金を、わざわざ、また俺ん所に振り込む感じになってたので、そうじゃなくて、完全に、こっちに移行してもらいました。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。

鈴木 それも、でも、結構、し、あの一、は、反対っていうか、あんまり積極的じゃなかったんですね？ ご両親。

芦刈 うん、もちろん。

鈴木 ああ。

芦刈 それも、もう、生活費の一部になってたんで。

鈴木 え、え。ご家族の？

芦刈 はい。

鈴木 ハ〜ハ〜ハ〜、ハ、ハ、ハ。で、え、つまり、芦刈さんの年金が、ご家族で使ってたってことなんですか。

芦刈 まあ、そういう人は多いですよ、うちの病棟。

鈴木 ああ、そうなんですか。

芦刈 うん。結構、そういう人、多いです。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。結構、当てにしてる人が多い。

鈴木 ハ〜え、ああ、そうなんですか。じゃあ、ご自身で使うことができなかった部分があるってことなんですか？

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ、え。

芦刈 だか、だから、多分、もっと、あの、まあ、そうね、僕も結構、使ってたんで、そんなに、たまりはなかったと思うんですけど、でも、たまってたやつもあったとは思うんですけど。

鈴木 はい。

芦刈 それは、もう、もうね、もう、僕も早くに諦めてて。

鈴木 ああ。

芦刈 取りあえず、今、これからのが入ればいいやと思ってて。

鈴木 はい。

芦刈 まあ、それで、この前、母から、まあ、10万円、振り込まれたので、だから、もう、それで僕は十分だなと思ってる。

鈴木 ああ、そうですか。でも・・・。

芦刈 いや、今、今、考えたら、なんで、は、20歳に、な、なったときに、自管理にしなかつたんだろうっていうのは、あり、ありますけど。いまさらなんですけど。

鈴木 あのー、芦刈さん、基礎年金1級ですよ？

芦刈 そうです。

鈴木 ということは、1カ月、大体、8万、入るわけでもんね。

芦刈 はい。それが2カ月に1回、入る。

鈴木 ですよ。そうすると、あれですか。やっぱり、あ、十分、自分のお金として使えて

なかったなっていうのがあるんですか。

芦刈 まあ、結構、自分も食べ物とかに、お金、使ってたので、まあ、一概に、親、向こうが、親が全部、使ったっていうことはないと思います。

鈴木 ああ。

芦刈 それによって、親、親に車、出してもらったりとかもしてたので、足りないとかも、あったらうから。

鈴木 うん。

芦刈 うん。全く使えてなかったとは思ってないですけど、いや、でも、多分、違うことにも使ってたんじゃないかなって、ちょっと思う。

鈴木 ああ、なるほどね。

芦刈 うん、うん。

鈴木 うん。病院で生活するときの、なんか、あの一、自己負担っていうのも、あるわけですよ？

芦刈 はい、入院費が。

鈴木 ああ。それは、じゃあ、年金から、まあ、支払ってたっていうことなんですね？

芦刈 そうですね。

鈴木 うん、うん、うん。うん、なるほどね。じゃあ、もう・・・。

芦刈 ちょ、ちょっと戻りはあったんで、あれなんですけど。

鈴木 はい。

芦刈 うん。

鈴木 戻り？

芦刈 た、多分、じ、実質、払ったのは、まあ、1万ぐらい、1万ちょっとぐらいだったと思う。

鈴木 そうですか。

芦刈 うん。

鈴木 じゃあ、結構、やっぱり余ってる部分がありますよね？

芦刈 多分、あると思うんですよね。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。

鈴木 じゃあ、もう、これからは自分で管理できるっていうことで、ある程度も分かるっていうことなんですか？

芦刈 そうですね。もう、い、これからは自分でできるので。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。

鈴木 やっぱり、なかなか、こう、何ていうんですかね、あの一、い、言えなかったっていうことは、あるんですか。その、自分の、こういうふう管理したいっていうことは。

芦刈 実は、ずっと言っていたんですけど、なかなか、うんって言ってくれなくて。

鈴木 退院する前か、あ、退院、き、決める前からですか。

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。少しずつ、はよう、もらってたら、もうちょっと、ためれたかなと思って。

鈴木 うん、そうですね。

芦刈 結構、カツカツなんで、だい、ちょっと心配ではある、や、家賃のところで。家賃も払わんといけんので。

鈴木 そうですよ。え、じゃあ、基本的に、その、自分の通帳に、たまってる額って、そんなになんないってことなんですか。

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ。

芦刈 そう、もうちょっと、ためようと思ったけど、なかなか、くれなかったんで、ためようがなくて。

鈴木 うん。

芦刈 うん、うん。

鈴木 なるほどね。

芦刈 で、引っ越しだの、何だので、いろいろあって。

鈴木 はい、はい。

芦刈 彼女のほうのも、ちょっと手伝ってたりしてなので、そういうので、ちょっと。もう、だから、もう、2人で、まあ、これからやっていく感じになると思うんです。余裕がないので。

鈴木 あ、じゃあ、彼女からも、いくらか出してもらわざるを得ないってことですか。

芦刈 うん。もう、うん。もう、それは、もう、お互いに持ちつ持たれつで、取りあえず、2人でやっていこうっちゅうことでは。

鈴木 ああ、そうですか。

芦刈 うん。

鈴木 あと、ちょっと、あの、病院の話、もう一回、戻るんですけど。あのー、子どもの頃って、お風呂って、みんなで入ってらっしゃいました？ 浴、浴槽に。

芦刈 はい。い、今もそうんですけど。はい。

鈴木 あのー、今、あの、以前、北、北に行ったときは、あれですよ。あの、エレベーター入浴になったわけでもんね？

芦刈 ああ、そうですね。

鈴木 ええ。

芦刈 うん。それ以前の、びよ、病棟は、みんな、浴室に抱えて入れてました。

鈴木 あ。

芦刈 はい。もう、僕がちっちゃい頃は、もう、みんな、抱えて、浴槽に入れてた感じですね。

鈴木 何人ぐらいで入ってたんですか。

芦刈 あんときは、結構、風呂、はい、大きかったんで、結構、5、6人、一遍に入れるぐらいだった。

鈴木 ああ。子どもだけで入ってましたか。

芦刈 いや、子どもとか関係なく。

鈴木 大人も？

芦刈 うん。まあ、寝たきりの人はストレッチャーで入ってましたけど、それ以外の座れる

人は湯船に入れて、うん、やってみましたけど。

鈴木 基本は、男性は男性だけでしたか。

芦刈 ああ、うん、もちろん、もちろん。

鈴木 はい、はい、はい。

芦刈 男性です。うん。

鈴木 あと、あの、台所って使うことはなかったですよね？ 病院の所で。

芦刈 ああ、僕たちは使うことはないですね。

鈴木 じゃあ、調理をする機会は全くない状況ですね？

芦刈 はい。調理とかは、できないですけど。

鈴木 ああ、なるほど。

芦刈 いや、あの、ラ、ラーメンにお湯、入れたりとか、レンジでチンはしてもらいますけど。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。

鈴木 それは、誰がやってくれるんですか、そういうことって。

芦刈 あ、それ、職員がやってくれます。

鈴木 看護師さんですか。

芦刈 まあ、看護師だったり、あの一、介助員だったり。あの、業務技術員って言って、助手さんがいるので、その人。

鈴木 業務技術員？

芦刈 うん。昔の看護助手ですね。

鈴木 なるほどね。

芦刈 うん。だから、その一、介護の仕事には、あまり入らない感じ。

鈴木 なるほど、なるほど。

芦刈 うん。そこは介助員さんがいるので。

鈴木 指導室の指導員さんとかも、そういうことをしてくれるんですか。

芦刈 ああ。あの、風呂、上がってから手伝ってくれたりはしてますけど。それでも、今は、の人たちっていうか、新しい人たちは、多分、あんまり、もう入ってないんじゃないかな。

鈴木 ふうん。

芦刈 だから、下にいる人は、まだ手伝いに来てますけど。が、今は、入らない人が多いみたいです。

鈴木 あ、入浴のところですね？

芦刈 はい。

鈴木 ああ。

芦刈 昔は、指導員とかの人が、中、入って、洗ってくれたりもしてましたけど。今は、そんなこと、しない人のほうが多いです。介助に入らないっていう人も確か、いますから。

鈴木 じゃあ、なんか、役割分担みたいなのが、できてるってということなんですか？

芦刈 そうですね。

鈴木 あと、洗濯って使う、洗濯機とか、使うことってできるんですか、病院の中で。

芦刈 多分、あの一、中央の洗濯場があるので、そこに、もう、出して、洗濯してもらってという感じですね。

鈴木 あの一、患者さんの、その一、衣類っていうのは、そ、そこで洗濯するっていうことですか。

芦刈 そうです。服、まとめて全部。

鈴木 病院の中にあるんですか。

芦刈 そうです。洗濯室があるので。

鈴木 へえ。じゃあ・・・。

芦刈 業者が入ってて、やってくれてる。

鈴木 じゃあ、家族が持っていくとか、ないんですね？

芦刈 ああ。自分で持ち込む人もいます。僕も、あの、も、自分の所に持って帰って、洗ってます。

鈴木 あ、それ・・・。

芦刈 あの一、高温で乾燥させるので、服が縮むんですよ。

鈴木 なるほど。

芦刈 コートなんか、一回、出しただけで縮んで返ってきて、着れなくなるんで。

鈴木 それも困りますね。

芦刈 うん。やっぱり色が変わったりとか、いろいろ、まあ、あるんですよ。

鈴木 はい。

芦刈 で、もう、僕は親に持って帰ってもらって、ちゃんと洗って、持ってきてもらってましたけど。

鈴木 それは、まあ、毎週ですか。

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ。親御さんって、あれですか。あの一、結構、もう頻繁に来られてたんですか。

芦刈 まあ、コロナになる前は、まあ、ちょっと回数、減ったんですけど、それでも、おやじのほうは、毎週、来てたので。

鈴木 毎週。週・・・。

芦刈 はい。母は、ちょっと、し、仕事とかあったんで。

鈴木 はい。週1回ぐらいですか、お父さまは。

芦刈 そうですね、大体、それぐらい。一応、かの、彼女が、その、来る前は、け、週に3日か4日は来てましたけど。

鈴木 今、彼女さんも来られてないんですよね？

芦刈 は、入れないんで。

鈴木 ですもんね。はい、はい、はい。

芦刈 その一、おやじが服、取りに来るときに、一緒に来てる感じです。

鈴木 あ。

芦刈 一緒に連れてきてもらって。うん。

鈴木 つまり、あの一、今、入れないけど、洗濯物は、と、持ってってくれる。

芦刈 まあ、入り口までは来るので。

鈴木 ああ。

芦刈 僕が、ちょっと、く、車いす、乗ってるので、遠くから見る感じ。

鈴木 あ、じゃあ、毎週のように、一応、来てくれるわけですね？

芦刈 はい、そうです。

鈴木 あ。

芦刈 うん。

鈴木 あと、あの一、えっと、なんか、収納スペースのことも、前回、ちょっと、お話しされてたと思うんですけど、子どもときの、りょうい、あの、なん、あの、何ていうんですか、その一、えっと一、子どもときの、その、病棟でも収納って、結構、難しかったですか。

芦刈 収納は、前の病棟は。

鈴木 8人部屋だったときですね。

芦刈 うん。上に、上に1個、でかい棚がありましたね。

鈴木 はあ。

芦刈 で、ちょっとカウンターみたいな所があって、その下に荷物が、ちょっと置ける感じでしたね。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。狭い場所だったんで。

鈴木 ああ。でも、なんか、自分の持ち物って、なんか、じゅ、十分、持ち込めてない感覚って、やっぱ、ありますか？

芦刈 そうですね。あまり、持ってはこれなかったと思います。

鈴木 うん。今でも、そうですもんね？

芦刈 そうですね。

鈴木 うん。

芦刈 今も、全部、移動式のチェストをもらうだけで、備え付けはないので。

鈴木 じゃあ、たまっていくものとかって、やっぱり家とかで預かってもらうっていう感じなんですか。

芦刈 そうですね。家がある人は家に、やっぱり持って帰ってます。僕も家に、ちょっと置いてたりしてました。

鈴木 ああ。じゃあ、今回、退院するにあたって、そういったものも、一応、も、も、あ、自分の新居に入れるような感じになるんですか。

芦刈 そうですね。こう、要らないやつは処分しましたけど。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。必要なやつがあるので、やっぱり、それは持っていこうと思って。この前も・・・。

鈴木 やっぱり、新居。

芦刈 うん。今、すぐに要らんやつは、もう、持っていってもらってます。

鈴木 ああ、ああ。

芦刈 だから、例えば、その、ひげそりとか、爪切りとか、あの一、まあ、すぐ、今でも使わないといけないので置いてますけど、すぐに要らないやつは、もう、取りあえず、持って帰ってもらってます。

鈴木 やっぱり、新居のほうが大きいイメージ、ありますか？ スペース的に。

芦刈 まあ、そうですね。1人で全部、自由に使えるので。うん。

鈴木 ちなみに、今の病室って何畳ぐらいなんですか。びよ、畳。

芦刈 いやあ、どれぐらいだろう。

鈴木 これ、ベッドがあつて。

芦刈 ベッドが四つ、あつて。

鈴木 はい。

芦刈 その間に、十分、人が入れる、両端で入れる。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。ベッド、きっちり並べたら、か、片側に、うん、結構、入る。

鈴木 でも、自分が使えるスペースっていうのは、あんまり。

芦刈 その、カーテンで仕切られてるので、この範囲内が自分の所ですね。

鈴木 今、芦刈さん、座ってらっしゃる、すぐ横にベッドがあるんですか。

芦刈 はい。

鈴木 ああ。

芦刈 右側の横にベッドがあります。

鈴木 じゃあ、そ、そんなに広くないですよ、やっぱり。

芦刈 広くないですよ、全然。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。

鈴木 ちなみに、これ、ポスターとかって貼ったりとかできないんですか、壁に。

芦刈 いや、その、壁に穴、開けたりとか、ちょっとあれやけど、でも、貼って剥がせるやつがあるじゃないですか。

鈴木 ああ、ありますね。

芦刈 ああいうので、貼っては、いいみたい。

鈴木 例えば、あの一、なんか、アイドルだとか、うん、アニメとか、それ、貼ってる人……。

芦刈 そうですね。僕もカレンダー、貼ってますね。

鈴木 カレンダー。ああ。

芦刈 前も、トリニータとかの、か、サッカーの。

鈴木 はい、はい。

芦刈 うん、貼ってたりしてたんですけど。

鈴木 あ、それは注意されないんですね？

芦刈 うん、それは大丈夫。壁さえ、傷つけなかったら。

鈴木 なるほど、なるほど。

芦刈 昔の病棟では、天井にアイドルのポスター、貼ってる人、いましたけど、今、そんな人は、いないです。

鈴木 今、それ、できないんですよね？ 逆にいうと。

芦刈 まあ、できんことはないと思うんですけど、なかなか、天井まで貼ってとは、言え、

言えない。

鈴木 フフフ、フフフフ。でも、やっぱり、ベッドで寝ている時間が、お、長いから、上を見たいっていうのがあるんですよね？

芦刈 そうですね。

鈴木 うん。

芦刈 うん。

鈴木 あと、その、病院の周辺の環境って、どうなってるのか、教えてもらいたいですけど、結構、や、丘の上とかにあるんですよね？ 病院って。

芦刈 いや、丘の上っていうか、別府って、あの、坂が多いんで。

鈴木 はい。

芦刈 まあ、結構、う、上のほうにはなるんですけど。

鈴木 ええ。

芦刈 あの一、冬とか、雪、降ると、うちの病院の、ちょっと下と、うちの病院の、ちょっと下から上は、全然、景色が違うので、う、うちの上からも雪がすごいですよ。

鈴木 そうなんですか。

芦刈 だから、あの一、下からタクシーで上がってくるときに、その、雪、降ってるときとか、西別府に行つてって言ったら、嫌がられます。

鈴木 ああ。そんなに降るんですね、雪が。

芦刈 そう。全然、ちょっと上がっただけで違うんですよ。

鈴木 結構、上のほうにあるんですか、病院は。

芦刈 まあ、結構、上にありますね。

鈴木 じゃあ、なんか、その一、外に気軽に出る、出れるような感覚ではないんですね？

芦刈 ああ、坂、多いんで、平地じゃないので、坂、下らんと、どこにも行けない感じ。

鈴木 それは、あれですか。子どものときから、そうですか。その一、なんか、ちょっと外に出て、なんか、出掛けるみたいな。

芦刈 そうですね。ちょっとね、スーパーに行こうと思っても、坂、下りんと行けなくって。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。

鈴木 行ったことってあります？ あのー、あ、歩けた頃。

芦刈 ある、ありますよ、もちろん。

鈴木 ああ。それは、やっぱり、さ……。

芦刈 結構。

鈴木 ええ。

芦刈 うん。結構、下まで下りたこと、あります。

鈴木 ああ。でも上ってくるのが大変だったっていう。

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。もう、多分、移動するときは、車で移動がほとんどですね。

鈴木 スーパーって、ちなみに、どんぐらい、距離、離れてるんですか。

芦刈 いや、すぐ下なんですけど、でも坂が結構、急なんで、1人で下りるのは怖い感じ。

鈴木 じゃあ、車いすだと、なおさらですね。

芦刈 そうですね。あの、すぐ横に公園があるんですけど、道を渡って反対側に行かないといけないんで、ちょっと行きにくいんですよ。

鈴木 あ、公園も。

芦刈 うん。

鈴木 ああ。

芦刈 で、目の前の公園も、結構、坂、多いんで。

鈴木 なるほどね。

芦刈 はい。

鈴木 ちなみに、あの、公共交通機関って、周辺は、どうなってます？ バスとか。

芦刈 バスは通ってますけど、一応、車いす対応には、なってるんですけど。

鈴木 へえ。

芦刈 なんか、僕が一回、頼んだら、ちょっと、こう、バス停が坂になってるから無理とか言われたりして、結構、断られたりすることもあるんで。

鈴木 ええ、そうなんですか、車いすが？

芦刈 うん。うん。だから、ほとんど、バスは乗ってないです。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。

鈴木 あんまり意味ないですね、ノンステップなのに。

芦刈 そうですね。なんか、呼吸器、着けてたからなのか、知らないですけど。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。

鈴木 え、じゃあ・・・。

芦刈 他の普通の、あの一、車いすの人、なんか、普通に乘ってましたから。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。結構、タクシーでも断られたりするんですよ。

鈴木 呼吸器、着けてるだけで？

芦刈 うん。いや、もう、嫌がられるとか。

鈴木 ああ。

芦刈 あと、あの一、バギー車ってストレッチャー型の車いす、そういう人、いるんですけど、まあ、その人は、うん、うん、断られるみたいね、最近は。

鈴木 バスでもですか。

芦刈 うん。バスは、もう、多分、基本、車いすの人たちが、多分、乗れないと思うんで。

鈴木 ああ、スペース的に。

芦刈 うん。その、タクシーです。介護タクシー。

鈴木 介護タクシーでも断られるんですか。

芦刈 はい。結構、断られます。

鈴木 へえ、そうですか。

芦刈 うん。

鈴木 そうすると、外出するのも大変ですね、病院にいて。

芦刈 そうですね。もう、介護タクシーしかないのです。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。

鈴木 ち、ちなみに、芦刈さんが彼女さんと出るときって、車が出るんですか。

芦刈 僕は、だから、ほとんど、車ですね。

鈴木 どなたが運転されるんですか。

芦刈 いや、もう、介護タクシー、呼ぶか、僕、個人、個人タクシーで介護タクシー、やっ
てる人がいるんで、その人が家に帰るときも格安で行ってくれるので、その人に、お願いし
てる感じ。運転も、すごい丁寧なんで。

鈴木 ああ、そうですか。じゃあ、一応、そういった特定の人であれば、呼吸器、着けてて
も OK なんですか？

芦刈 ああ、もう、その人は、もう、個人的に契約してるので。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。ちょっと、しよ、ある人の紹介で。

鈴木 なるほどね。

芦刈 うん、うん。

鈴木 でも、一般的な、そういう介護タクシーの人で断る人っていうのは、結構、いるっていうことなんですかね？

芦刈 そうですね。

鈴木 へえ。

芦刈 あの、一応、その一、別府市が指定してる場所っていうと、タクシー券、使えるところが3社、あるんですけど、でも、2社は、もう、ほとんど断られます。

鈴木 ええ。へへ、へへ、そうなんですか。それも。

芦刈 その、い、1社が、すごいよくしてるので、そこに頼るしかない感じ。

鈴木 そうですか。

芦刈 病院の、院外でもそうですね。もう、そこぐらいしか、やってくれないので。

鈴木 なるほどね。

芦刈 何だかんだ、理由を付けられて。うん。

鈴木 で、バスは、人工呼吸器、着けてる場合っていうのも、結構、嫌がられるんですよね？

芦刈 そうですね。ぜ、絶対とは、じゃないですよ。僕は、そうでしたね。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。何だかんだ、理由を付けられました。

鈴木 うーん。じゃあ、それ、退院された後も、じゃあ、なかなか、そうやって、やっぱり、タクシーを使って移動するような感じになるんですかね？

芦刈 そうですね。その、センターの仕事で動くときは、まあ、センターが車、出してくれると思うんですけどね。

鈴木 ええ、ええ、ええ。

芦刈 個人的に出掛けるときは、やっぱり借りづらいので。

鈴木 なるほど。

芦刈 うん。

鈴木 え、その、ちなみに、個人タクシーっていうのは、お幾ら、かかるんですか。

芦刈 いや、もう、う、うちの家まで、まあ、40キロぐらいあるんですけど、往復で1万円で行ってくれるんです。

鈴木 そうですか。

芦刈 うん。普通だったら、片道で5万か6万、かかる。

鈴木 ですよ。

芦刈 うん。

鈴木 はあ。

芦刈 もう、それぐらいでいいよって言ってきて。

鈴木 はあ。往復で、ご、1万ですか。

芦刈 そうです。

鈴木 それも随分と、フフフフ、すごい格安ですね。

芦刈 で、途中で、ちょっと、ご飯、食べに寄ってもいいよとか言ってくれるので。

鈴木 へえ。

芦刈　すごい、よくしてもらってるんで。

鈴木　それ、どうして、そんなに、その個人タクシーの方って、し、親切なんですか。

芦刈　いや、なんか、その人が、すごい親しくしてる障害者の方がいて。

鈴木　え、何会社？

芦刈　障害者の方。

鈴木　あ、障害者。

芦刈　うん。その人、太陽の家で働いてるんですけど、その人と、たまたま、自立支援センターのバーベキューで、まあ、ちょっと、席が一緒になって、そこで、「タクシー、なんか、いいところ、ないですかね」って話してたら、「私が使ってる所、紹介するから、言ってみて」って言ってくれて。その人も、その人の紹介じゃなかったら、多分、や、やってないと思いますけどね、とか言ってたんで。

鈴木　へえ。

芦刈　その人の紹介だから、もう、親切にしてくれるみたい。

鈴木　はあ。

芦刈　で、あの。

鈴木　え、ちなみに。ええ。

芦刈　うん、うん。その人に本当に感謝です。

鈴木　その人って、太陽の家で働いてる人なんですか？

芦刈　太陽の家で働いてる女性の方です。

鈴木　ちなみに自立生活してる人なんですか、その人。

芦刈 うん、そうですね。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。

鈴木 でも、なかなか、そういう、つ、つ、つてがない人って大変ですね。

芦刈 そうですね。なかなか、こういう、つても、ないと思うんで。

鈴木 ああ。

芦刈 僕も、たまたま偶然、そこで、その人に出会ったから、あるだけで、なかったら困ってました。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。

鈴木 じゃあ・・・。

芦刈 一応、自分の所の家の車が、リフトは付いてるんですけど、リフトっていっても、くる、あの一、座席が下りてくるタイプの。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。だから、乗り換えんといけなくて。

鈴木 はあ、はあ、はあ、はあ。

芦刈 呼吸器、着けられてると、車に乗り換えるのが大変で。

鈴木 ですね。

芦刈 うん。抱えて乗せるのも大変だし、僕もきついし。

鈴木 うん。

芦刈 で、車、リフトで移動したいってなったときに、そしたら、その人と出会って、紹介してもらえたので。

鈴木 じゃあ、その人は専用の、そういう車を持ってるんですね？

芦刈 そう、あの、普通の、あの、ワゴン車を、まあ、あの一、ちょっと、か、改造っちゅうか、リフトしたりして乗ってたんで。結構、僕、あの一、背が高いんで、つかえてたんですよ、上。

鈴木 はい、はい。

芦刈 そしたら、なんか、専用で、その、リフト車、買ってくれて、今は、それで来てくれるように。

鈴木 へえ。え、そ……。

芦刈 それ、それにしたら、需要が増えたらしくて。

鈴木 フフフフ、フフ。

芦刈 逆に、向こうも、よかったって、い、言ってたんですけど。

鈴木 え、じゃあ、結構、何人か、利用されてる人、いら、いらっしゃるんですね？

芦刈 そうですね。はい。結構、突然、今から来てとか言われて、困るとは言っていました。

鈴木 ほう。

芦刈 うん。その、その人、別府の人じゃないんです、そのタクシーの人。隣町の日出町から来るので。

鈴木 日出町。

芦刈 うん。別府の隣なんですけど。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。だから、来るのも、ちょっと大変なんです。

鈴木 うん、うん、うん、うん。

芦刈 うん。

鈴木 じゃあ、まあ、退院された後も、その人の手助けを借りるってということですね。はい。

芦刈 そうですね。今は特に、なかなか、その一、外出、多分、する人、減ったので、なるべく利用しようかなと思って。

鈴木 ああ、なるほど、なるほど。

芦刈 少しでも助けになればなど。

鈴木 あ、そうですね。今は、なんかね、大変でしょうね、恐らく。

芦刈 うん。だから、今度、9月にコロナのワクチン接種があるんですけど、2回、頼んでるので。うん。まあ、ちょっと、こういうとき、恩返ししないとね。

鈴木 ああ、なるほどね。あと、あの、その、病室っていうか、その、病棟って、なんか、チャイム、鳴ったりとかします？ 朝、起きる時間とか。

芦刈 いや、ないです。

鈴木 それは、ないですよ。でも、まあ、全部、き、時間は決まってるわけでもんね？

芦刈 そうですね。もう、電気ついて、起こしに来ますね。

鈴木 ああ。あの、お食事って、あの一、病院で作ってらっしゃるんですか。

芦刈 ああ、もちろん。

鈴木 あの一、なんか、業者に頼むとか、そういうことではなくて、病院の中で？

芦刈 ああ、業、業者が病院内で作ってる。

鈴木 あ、でも、びよ・・・。

芦刈 前は、病院の職員がやってたんですけど、今は、外に委託する感じで。

鈴木 ああ、ああ。でも、まあ・・・。

芦刈 今年から、ちょっと業者が代わって、味がちょっと変わったんですね。

鈴木 フフフ。それ、でも病院の中では作ってくれるんですね？

芦刈 そうですね。

鈴木 へえ。

芦刈 で、そこ、あの一、栄養士がいて。

鈴木 はい。

芦刈 だから、結構、あの一、ミキサー食だったり、刻みとか、結構、細かいことをやってくれるので、非常に助かってますけど。

鈴木 じゃあ、なんか、冷凍を、そのまま出すとか、そういうことじゃなくて、そこで、そのときに作ってくれるっていうことですね？

芦刈 そう、一応、作ってるみたいです。

鈴木 へえ。

芦刈 で、必ず、フルーツは付くんですよ。

鈴木 へえ。

芦刈 昔から、うちの病院は、フルーツは付いてました。

鈴木 あ、そうですか。

芦刈 で、うち、多分、よその病院より、食事、いいって言われます。

鈴木 あ。

芦刈 で、僕が、僕たち、入った頃は、もっと良かったんで、だいぶ、落ちたなと思いますけど。

鈴木 でも、まあ、まあ、満足されてます？ 食事は。

芦刈 でも、ほとんど、持ち込みのを食べたりしてる。

鈴木 フフ。

芦刈 もちろん、病院食、おいしいのもあるんで食べるんですけど。

鈴木 はい。

芦刈 うん。

鈴木 でも、外のが、おいしい？

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ。

芦刈 あの、昔は小児科だったんで、メニューが、やっぱり、子どもが好きなのが多かったです。で、下で作って、その、給食みたいに病棟に持ってきて、病棟で配ってたんですよ。

鈴木 へえ。

芦刈 ついで、振り分けて。

鈴木 はい、はい、はい。

芦刈 だから、カレーとかミートソースの、ミートソース、お代わりしたりとかが、昔はできてたんで。今、もう、下で全部、配膳して持ってくるので。

鈴木 あ。

芦刈 うん。もう、こっちで配るだけみたいな感じで。

鈴木 つまり、1人分が、もう用意されてるってということなんですか？

芦刈 そうですね。ワゴンも、もう、その、専用の、あの一、配膳車があつて。うん。冷たい所と、あったかい所に分かれて入る。うん。かごずつ、入れられるやつがあるみたい。

鈴木 うん。じゃあ、お代わりとかって、なかなか、できないんですか。

芦刈 そうですね。もう、そういうのは、できません。

鈴木 前の日から、なんか、その一、ご飯の量を多くすることって、できますか。

芦刈 それは事前に栄養士に頼んどけば、まあ、できる。けど、ドクターの許可があれば。うん。

鈴木 芦刈さん、そういうことは、されてないんですか。

芦刈 一応、僕、あんまり、そんなに食べれないんで。

鈴木 あ、そんなに食べないんですね。

芦刈 ご飯も1杯、食べれないぐらいなんで。

鈴木 ああ。昔からです？

芦刈 あんまり、ご飯粒が好きじゃないので。

鈴木 フフフ、フフ、フフ、フフ。

芦刈 で、あんまり、もともと食べないんで。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。なんか、この体格なんで、すごい食べられるって思うんやけど、この頃は本当に食べれなくなってきましたね、だんだん、量が。

鈴木 え、む、昔は、どうだったんですか。

芦刈 昔は、結構、おいしくないやつも、がんがん食ってて、結構、まあ、食べれてましたけど。

鈴木 その頃も、一応、じゃあ、事前に言っとけば、ご飯の量とか増やせたんですね？

芦刈 ああ、まあ、しょっちゅうは、できないんですけど。

鈴木 へえ。

芦刈 どうしても足りないということなら、まあ、増やしてくれたりは。

鈴木 増やすっていうのは、ど、どのぐらいまで、できるんですか。ふ、ご飯、い、あの、い、2杯とか、2杯とか、3・・・。

芦刈 いや、それ、それは、できないと思います。

鈴木 それは、できない？

芦刈 多分、な、何十グラムとか。

鈴木 ああ、そんなもんですか。

芦刈 うん。まあ、そんなん、言ったことないんで分からないですけど。

鈴木 フフフフ、フフフ。あの、ご飯って、あの、病院の中で炊いてくれるんですよね？

芦刈 うん、炊いてるみたいです。

鈴木 ああ。

芦刈 しかし、あの、固かったり、柔らかかったり、いろいろ、その日によって違います。

鈴木 なるほどね。

芦刈 うん。

鈴木 あの、栄養管理士の人に、やっぱり管理されてもらったほうがいいですか。

芦刈 いやあ、管理されると、なんか、好き嫌い多いんで、食べれないのが多くなるかなって。うん。一応、あの、食べやすい、食べにくいがあるんですよ。やっぱり飲みにくいやつとか。

鈴木 ああ。

芦刈 結構、肉とか、ここの、固くて食べれなかったりします。

鈴木 へえ。え、じゃあ・・・。

芦刈 いや、うん、この前、あの、食べ放題に、去年ぐらいに焼き肉屋さん、行ったら、全く食べれなかった、かったね、固くて。

鈴木 ああ。

芦刈 だから、相当、高い肉じゃないと、とても食べれないです。

鈴木 なるほどね。

芦刈 うん。

鈴木 じゃあ、退院された後は、じゃあ、まあ、そういうふうを考えながら、や、やれるってということで、そっちのほうがいいってということですか。

芦刈 うん。まあ、自分で、ちょっと、野菜とか好きなので、野菜、食べて、なるべく野菜、食べようと思ってる。

鈴木 ああ。なんか、でも、栄養管理士さんっていないですよね？ あの、退院した後って。

芦刈 ああ、いないです。一応、栄養指導も、西別府で、できるみたいなんですけど、もう、言うことを聞かんからってということで、け、まあ、話は聞いてもいいですけど。

鈴木 フッフ。

芦刈 フ。

鈴木 じゃあ、別に、それは、まあ、いいか、要らないかなって感じなんですかね？

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ。健康面での不安とかないですか、そこの部分では。

芦刈 まあ、ちょっと塩分とかは気を付けないとなつて。

鈴木 うん。

芦刈 結構、水分、たまりやすく、利尿剤とか飲んでるので。

鈴木 はい。

芦刈 うん。その辺を、ちょっと、水分と塩分は気を付けないとなつて。

鈴木 うん、うん、うん、うん。

芦刈 うん。

鈴木 じゃあ、その辺は、じゃあ、かい、ご、介助者に、いろいろ、芦刈さんが指導っていうか、して、やっていくような。

芦刈 うん、まあ、僕が自分でセーブしながら。

鈴木 はい、はい。

芦刈 うん。まあ、介助者の人は、それで、僕が言ったとおりにしてくれるだけなの。うん。

鈴木 そのほうがいいですか。

芦刈 そうですね。いろいろ言われるのも、あんまり好きじゃないので。うん。

鈴木 じゃあ、もう、これからは、かん、完全に自由だっていうことで。

芦刈 うん、そうですね。

鈴木 ああ。あの・・・。

芦刈 もちろん、ちゃんと考えてやりますけど。

鈴木 ええ、ええ。あのー、今、病院の食事って、どこでされてます？

芦刈 今、部屋です。

鈴木 昔から、そうでしたか。

芦刈 いや、昔は、食堂で何人かで食べてて、まあ、まとめて食介する感じでした。

鈴木 じゃあ、いつから、あの、病室で食事されるようになったんですか。

芦刈 こっち来てからかな。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。でも、まあ、車いすに乗れる人が少なくなったんで、どんどん、ベッドサイドになったので。僕も、あの、朝と夕方、ベッド、で、ベッドをギャッチアップして起こして食べてるんで、必然的に部屋になりますね。

鈴木 ああ、なるほどね。

芦刈 なる、それで、食堂のほうに、もう、目が行かないっていうことで、昼も、あの、部屋で食べるように、大体。だから、自分で食べる人、動ける人が3人ぐらいいて、その人たちは食堂で食べてますけど。

鈴木 歩いていってるんですね？

芦刈 いや、歩けないです。車いすです。

鈴木 ああ、車いすで。

芦刈 食事は自分でできる人たちなので。

鈴木 あ、なるほどね。あの一、芦刈さんとしては別に病室で食べてても、もん、あ、いいかなっていう感じですか。

芦刈 ああ、別に大丈夫ですね。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。病室にも、あの、食事する人が、まあ、昼は3人いるので。うん。だから、1人が、みんなの所を、俺ん所、一回、来て、口に入れて、次へ行ったら、行ってっという感じで。

鈴木 ええ、えっと、介助する人が？

芦刈 うん。あの、ナースが。

鈴木 ああ、ああ。

芦刈 うん。

鈴木 え、じゃあ、病室に1人、こう、来るような感じですか。

芦刈 そうです。そんなに人数、いないんで。

鈴木 ああ。順番・・・。

芦刈 1人が、ぐるぐる回って、食べさせる感じ。

鈴木 フフ、フフ、なるほどね。

芦刈 いや、僕、そのほうがいいんですよ。

鈴木 ああ、そうですか。

芦刈 ずっと横におられて、待たれるほうが、き、嫌なんで。

鈴木 なるほど、なるほど。

芦刈 だから、ちょっと他の人を食べさせてる間に飲み込む感じで、戻ってくる、くると、ちょうどいい感じなんで。

鈴木 フフフフ、フフフフ。でも・・・。

芦刈 でも、みんな、あの一、付きっきりがいいやろうって言われるけど、僕は逆に、付いちゃかんで、いきたいですね。うん。

鈴木 で、でも退院した後は、もう、あれですよ、介助者の人と一対一ですよ？

芦刈 うん。だから、もう、「ゆっくり食べるけん」ってのは言ってます。

鈴木 ああ、ゆっくり食べ、食べると。

芦刈 で、その一、もし、そのときに、一緒に、ご飯、く、食べてもいいし、まあ、ご飯、そのとき、食べるのが嫌としても、それは、途中で、本、読んでてくれてもいいし。

鈴木 なるほど。

芦刈 で、言ったときに、してくれればいからって言って。それ、ちょっと、マニュアルにも書いたんですけど。

鈴木 なるほどね。

芦刈 待たれると焦るので。

鈴木 ああ。

芦刈 たまに、あの一、せっかちな人がおって、次のをスプーンに置いて、口の前まで持ってくる人がいるんです。

鈴木 ああ。

芦刈 それ、されると、余計、焦るんですよね。あれは、ちょっとやめてほしいなあって思っ
て。

鈴木 ああ。たまに、そういう看護師さんがいるんですね？

芦刈 はい、いますよ、そういう人も。うん。

鈴木 うん。やっぱり、看護師さんも、い、お忙しいから、い、急ぐんじゃないんですか、
結構。

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ。

芦刈 なるべく早く食べてほしいみたいな感じ、雰囲気は、なされますけどね。

鈴木 でも、やっぱり、ゆっくり食べたいと思うっていうことですね？

芦刈 そうですね。でも、ほとんど、もう、コロナになって、半分でも、時間見て、もうい
いやと思って、やめることが多いです。

鈴木 あ、食事をやめちゃう？

芦刈 ああ、もう、途中で、ちょっと時間過ぎたら、あの一、あの一、次の業務になるので、
自分がいろいろと困るので。

鈴木 あ、自分がつて、芦刈さんが？

芦刈 うん、そうです。その後のことが、いろいろ。

鈴木 あ、予定が入ってて？

芦刈 うん、うん。

鈴木 ああ。え・・・。

芦刈 だから、もう、時間を見ながら、食べ、食べてますね。

鈴木 30分とかですか。

芦刈 まあ、短いときは、それぐらいしか、ないときがありますね。

鈴木 へえ。

芦刈 あのー、配って、すぐ来る人もいるんですけど、他んことで、ちょっと、手、取って来れなかったりすると、実質30分ぐらいしかなくて、食べれんよっちゅう思いから、必要最低限だけ食べて、終わる感じ。

鈴木 ああ、そうですか。でも、それも、なんか、つらくないですか。

芦刈 そうですね。ゆっくり食ってたんで、今まで。

鈴木 ああ。

芦刈 で、ちょっと焦って飲み込んで、むせたことが、最近、何回もあるので。

鈴木 ああ。

芦刈 それから、ちょっと、もう、もう、ちょっと切り上げようっちゅう思って。

鈴木 え、それまでは、どのぐらい時間かけて食べることができたんですか。

芦刈 え、2時間ぐらい、かけてましたね。

鈴木 あ、それやっても、別に、あれですか、看護師さんは。

芦刈 あ、あと、彼女が全部、やってくれたんです、後のことを。

鈴木 あ、そういうことですか。

芦刈 その後は、手、取ったら駄目だと思うんですけど、全部、後のことはやるので、まあ、その時間に。

鈴木 なるほどね。あ、彼女さんがいたからってということですね？

芦刈 そうです、そうです。

鈴木 もし、じゃあ、いなかったら、やっぱり同じように早く食べなきゃいけなかったという。

芦刈 そうですね。職員がやらないといけない。

鈴木 ああ、なるほどね。

芦刈 そうやっけん、もう、彼女が来てるときは、ほとんど、職員に食介されたこと、なかったです。朝ご飯ぐらいで。だから、コロナになった頃は、あの、歯磨きの仕方も、よく分からんとか言われて。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。やったことない人ばかりだった。

鈴木 はあ。

芦刈 うん。まあ、それも良くないんですけど。

鈴木 はい、はい、はい。

芦刈 それぐらい来てたので、まあ。

鈴木 ちなみに、か、彼女さんが来られたときって、毎日、来られてたわけですよね？

芦刈 ほぼ毎日、来てました。

鈴木 じゃあ、もう、食事介助から、か、歯磨きまでっていう。

芦刈 で、たまに来れないときは、代わりに親が来てました。

鈴木 ああ。だからか。

芦刈 だから、夕方は、ほとんど、誰かがいる感じだったんで、それで、ゆっくり食べれたので。

鈴木 なるほどね。

芦刈 そのつもりでいたら、全然、今度は食べれなくなったので。

鈴木 はい、はい。

芦刈 だから、もう、それで、なんか、病院食は、時間、かかるなって思ったら、簡単に済ませるカレーとか、レンジにかけて食べたりとか、食べやすいのを選んで食べたりしてたので。

鈴木 うん。

芦刈 うん。

鈴木 なるほどね。じゃあ、もう、看護師さんとしても、今、じゃあ、大変な状況になってるっていうことですね？

芦刈 そうですね。もう、だいぶ、慣れました、慣れたと思うんですけど。

鈴木 うん。

芦刈 だから、ずっと、それで何人か来て、食介してたし、細かい調整とか全部、親がしてくれてたので。

鈴木 なるほど。

芦刈 うん。最初は、みんな、戸惑ってましたね。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。

鈴木 あの、病院の中では、アルコール、飲む人っていますか。

芦刈 いやいや、一応、飲んだら、強制退院なんで。

鈴木 フフフ。それは、じゃあ、駄目なんですね？ 誰も。

芦刈 うん、駄目ですね。

鈴木 ああ。

芦刈 昔は、あの、自治体の行事では、の、飲んでも OK だったんです。

鈴木 ああ、ああ。

芦刈 うん。夏祭りとか忘年会とか。

鈴木 はい。

芦刈 そういうときは、一応、まあ、飲んでいいよって言って。そしたらね、忘年会とか師長が来て、飲んでましたよ。

鈴木 へえ。

芦刈 そんな時代もあったのに、今じゃ、絶対、無理ですけど。

鈴木 え、ど、どこで飲むんですか。

芦刈 ああ、まあ、作業棟って行って、集まる所あって。そこで忘年会、すき焼きしたり、出前、取ったりしてましたけど。

鈴木 え、い、いつから駄目になったんですか、それが。

芦刈 もう、自治会がなくなってからですね。

鈴木 え、い、いつ、なくなったんですか、自治会。

芦刈 この病棟ができるとき、1年前なんで、2012年です。

鈴木 2012年。

芦刈 もう、あの一、なかなか、動ける人がいなくて、動けるのが負担になるなと思って。

鈴木 はい。

芦刈 ちょっと、まだ続けてたら、僕が、ほとんど、やらないといけなくなっちゃったので。

鈴木 はあ。

芦刈 うん。だから、もう、思い切って解散しました。かなり、あの一、会費とかの、たまりがあったんで、あの、割って、会員で、あの、分け、分けました。うん。

鈴木 そ、その自治会って、あの、結構、もう、芦刈さんが、もう、入ったときから、あったんですか。

芦刈 一応、そのずっと前からあります。

鈴木 ああ、そうですか。

芦刈 だから、もう40年前とか、50年前ぐらいから、あったのかな。

鈴木 設立当初からっていう。

芦刈 多分、そうです。

鈴木 ああ。

芦刈 僕が、もう、検査入院で4歳のときに入ったときは、ありましたから。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。だから、もう40年以上はあるって感じでしたけど。

鈴木 そうですね。

芦刈 うん。

鈴木 あのー、でも芦刈さんが自治会の活動をされるようになったのは、高校、卒業してからですよね？

芦刈 そうですね。まあ、高3のとき、結構、手伝わされてましたけど。

鈴木 ええ、ええ、ええ。

芦刈 うん。まあ、動けたので。

鈴木 はい。

芦刈 うん、うん。

鈴木 あのー、自治会の、こう、構成ってどうなってますか。あのー、会長がいて、副会長がいてっていう。

芦刈 うん。で、書記がいて、あとは広報がいて。うん。

鈴木 で、会計がいる。

芦刈 はい、会計がいる。

鈴木 はあ、はあ、はあ。で、芦刈さんは、どういう役割をされたんですか。

芦刈 その、ほぼ全部、やりました。

鈴木 会長から、何から何まで？

芦刈 会長も、会計も、まあ、副会長も、広報も、やり、やりましたから。

鈴木 ああ。

芦刈 一応、全ての役どころをやったと思います。

鈴木 その一、高卒のとき、や、やり始めたときって、あの一、えっと一、何人ぐらい、いらっしゃったんですか、自治会のメンバーは。

芦刈 いや、かなり、いましたよ。40人は、いたじゃないんですか。

鈴木 へえ。40人ということは、えっと、患者さんの数、80でしたよね？ 確か。

芦刈 あの頃、あの一、学生もいたし、中には、はい、入ってない人も。

鈴木 あ、そういう人も、か、会員になれるんですね？

芦刈 そう、そういうのは自己選択なんで。

鈴木 ええ、ええ、ええ。

芦刈 で、まあ、一応、卒業したからしか入れなかったんですよ。

鈴木 あ。

芦刈 そう、こうそ、高卒から入れるみたいで。

鈴木 高卒から入れるんですね？

芦刈 うん。高校、卒業してから、それで入るみたいだね。

鈴木 それ、でも、病院の患者さんでないと入れないんですよね？

芦刈 うん、もちろん、もちろん。

鈴木 ですよね。

芦刈 うん。

鈴木 で、えっと一、40名ぐらい、いらっしゃったっていうことは、患者の大体、半分ぐらいってことですか。

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ。

芦刈 学生も多かったんで、まあ、そうですね。

鈴木 えっと、学生も多かったって、でも、活動、えっと、ごめんなさい、会員になれるのは、えっと、何歳から、なれるんですか。

芦刈 え、18歳以上です。

鈴木 あ、18歳。

芦刈 高校を卒業してからなんで。

鈴木 ああ、ああ。

芦刈 うん。

鈴木 で、あの一、その自治会の、なんか、その、何ていうんですかね、活動っていうのは、なんか、決まってることってあるんですか。

芦刈 まあ、あの、年間の行事が決まってるのと、まあ、病院と、なんか、交渉することがあれば、みんなの意見を聞いて、まとめて、それを代表して持っていくっていう感じ。

鈴木 あ。

芦刈 うん。

鈴木 その、病院と交渉っていうの、これまで、どんなことで交渉されましたか。

芦刈 例えば、その、昔は、ご飯が4時だったんですよ、夕ご飯が。

鈴木 はい。

芦刈 それで、6時にしようって話があったときに、6時じゃ遅いっていうて。下ん所は、よか、下の人たちはいいですよ。うちの病棟では、6時から食事だと、あと、もう、すぐ寝る時間になるので何もできないってなって、じゃあ、せめて5時にしてくださいっていうお願いを、まあ、病院にしたりとか。

鈴木 で、その6時じゃ遅いっていうのは、その、病院側が言ったっていうことですね？

芦刈 いや、病院側が6時にするって言ったのを、それじゃあ、僕たちが遅くなるって言って、5時にしてくれってお願いした。

鈴木 あ、患者の側から5時にしてほしいって言ったんですね？

芦刈 はい、そう、そう。

鈴木 あ、なるほどね。

芦刈 一般病棟は6時ですけど、ちょっと、うちは、まだ、いまだに5時です。

鈴木 あ、あの一、その6時にするっていうのは、い、いつ、そうやって病院側は言ってきたんですか。

芦刈 それ、もう、だいぶ、前に言ってきました。一回、変えるって言ったのは。

鈴木 5階に移ったときですか。

芦刈 いや、この病棟、できる前から。

鈴木 前から。北、北病棟にいるときから？

芦刈 はい、はい。そう、そう。うん。

鈴木 でも逆に、なんか、6時って、病院としては大変になるような気がするんですけど、どうして6時にしようって言ったんですか。

芦刈 いや、もうなんか、一般の人、大体、6時、病院。今、大体、6時ぐらいなんで。

鈴木 はい。

芦刈 うん。だから、その流れで、じゃないですか。

鈴木 ああ、ああ。でも、まあ、一応、患者さんたちで、まあ、それは5時にしてほしいってということで、向こうも、あの、認めてくれたと。

芦刈 けど、6時なるところを、遅めに出る人が、そういうのに時間がかかって朝の業務ができないので。

鈴木 うん。

芦刈 こう、5時が限界じゃない。6時15分までに。うん。

鈴木 あ、その、か、あの、要するに、職員が帰ってしまって、なんか、支援ができない。

芦刈 うん。やけん、前、ご、5時ぐらいに終わってたので、だから、ご飯も4時だったんで、それに合わせて、ちょっと遅出とか作ってくれて対応してくれたんですよ。

鈴木 ああ、なるほどね。じゃあ、まあ、そういう形で、ちょ、自治会は、まあ、機能してたっていうか。

芦刈 まあ、そうですね。

鈴木 ただ、まあ、新棟に移転するとか、そういう話は、やっぱり駄目だったわけですよね？
なんか、言えないわけでもんね。

芦刈 まあ、それは、もう、ね、病院の方針なんで、なかなか厳しかったみたいよ。うん。
お金が絡むことなんですよ。

鈴木 うん。他にもありますか。なんか、そういう体制に関わることで変えてきたことって。

芦刈 あと何か、あったかな。まあ、特に、まあ、覚えてないんですけど。

鈴木 ええ。

芦刈 それを一番、覚えてるから。

鈴木 ああ、なるほどね。あの一、年間の行事って、例えば、どういうことをやってたんですか、自治会として。

芦刈 あの一、大きな行事が夏祭り。

鈴木 はい。

芦刈 で、まあ、あの一、出店、出したり、人、呼んだりして、それが一番、力、入れてたかな。あとは年末の忘年会とか、あとは、大きいのは、それぐらいで。うん。

鈴木 あるいは、クリスマス会とか正月とかもですか。

芦刈 ああ、クリスマス会もやってましたね、そういえば。

鈴木 ああ。

芦刈 前は病棟ごとでやってたんですけど、うん。一応、まあ、(#####@01:15:52)会、あ、会がやるようになったので。はい。

鈴木 その自治会ってあれですよね？ 病棟の自治会ですよね？

芦刈 そうですね。

鈴木 他の、他の病棟にも自治会があるんですか。

芦刈 いや、あの一、北2と北3病棟が筋ジス病棟で、その二つの病棟の。

鈴木 自治会。

芦刈 はい。あとは、あの、重心病棟は、か、家族がやってる、家族の会ってというのがあって。そう、うちも一応、親の会があったんですけど、その、その親の会が、夏祭りとかは手伝ってくれる。

鈴木 あの一。

芦刈 焼き鳥、焼いたり、コロッケ作ったりとか。一応、それは、親が全部、やりました。はい。

鈴木 その夏祭りのときって、地域の人って来ました？

芦刈 ああ、一応、来てOKだったんで、僕たちも呼び、呼び掛けてました。

鈴木 住民が来るってということですか。

芦刈 そうですね。新聞とかテレビにも出てましたから。うん。

鈴木 それ、どこに来るんですか。どこで夏祭りってやるんですか。

芦刈 あの、養護学校の体育館。

鈴木 そこで出店を出してたってということですか。

芦刈 そうですね。

鈴木 へえ。

芦刈 やい、焼いたやつを、そこで売る感じ。中では焼けないですよ。

鈴木 ああ。

芦刈 体育館の中なんで。

鈴木 そうですよ。

芦刈 うん。

鈴木 じゃあ、住民が買いにきて、来ることもあると。

芦刈 はい、はい。はい。

鈴木 へえ。

芦刈 ど、どれぐらい来てたかは、ちょっと分からないですけど。

鈴木 まあ、そこそこは来てた？

芦刈 と思うんですけどね、把握はしてないので。

鈴木 ああ。でも、なんか、普段とは違う人がいるなっていう感じはあるっていうことですね？

芦刈 まあ、それはありました、たまに。うん、うん。一応、それに向けて、患者さんの作品を出す。はがきにしたり、Tシャツにしたりしてました。結構、買ってもらったりしたから。はい。

鈴木 あの、さっき……。

芦刈 それを、あの一、運営費に充ててました。その売り上げを。

鈴木 へえ。あの、人を呼んだりっていうのは、結構、有名人、呼んだりとかなんか、してたっていうことですか。

芦刈 ああ、そうですね。あの一、うん、トリニータの選手とか、まあ、あの、バスケの選

手だったりとか、まあ、いろんな人を呼びました。

鈴木 で、そういうときに、住民の人も聞きに来たりとかするっていいことですね？

芦刈 まあ、あ、少しは来てたと思います。

鈴木 なるほど、なるほど。

芦刈 一応、広告はしてたので。うん。

鈴木 で、その、忘年会のときに師長さんと、師長さんが来るっていいこともあったっていいことですね？

芦刈 まあ、師長っていても、看護、看護師長です。

鈴木 ああ、看護師長。ああ、なるほどね。

芦刈 うん、うん。

鈴木 はあ、はあ。で、あの、ただ、自治会としての活動が、まあ、だんだん、できなくなってる、あの、それは、まあ、皆さんが、まあ、動けなくなってくることと関係してたっていいことですね？

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ、ああ。

芦刈 こう、寝た、寝たきりの人が多くなってきた。

鈴木 うん、うん、うん、うん。

芦刈 で、食事も食べれない人が、今、増えたので、食べることとかの行事が、どんどん減っていきました。

鈴木 なるほど。あの一、親の会っていいのは、あ、あったんですよね？ さっき、おっしゃってたように。

芦刈 はい。

鈴木 ぜ、う、何人ぐらい、入ってましたか、親の会って。

芦刈 いや、なんか、ほとんど、入って。あ、その一、自治会に入ってる親は、ほぼ、入ってました。

鈴木 あの、例の筋ジス協会の、あれですか。

芦刈 あ、それはまた、支部、大分県支部。これは、また別で。

鈴木 ああ、それは、また別。

芦刈 うん。別ですけど、もう、大体、親の会と一緒にしたいな。

鈴木 ああ、一体化してるっていうことですね。

芦刈 親がやりました。うん。

鈴木 ああ、なるほどね。

芦刈 うん。もう、今、動けなくなる前は、患者たちが、少しずつ支部の仕事もしてて、まあ、ちょっと、また、できなくなっちゃったので。

鈴木 あ、じゃあ、協会との接点もあったっていうことなんですね？ 自治会として。

芦刈 ああ、そうですね、一応。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。

鈴木 なんか、大会の手伝いしたとか、そういうことですか。

芦刈 ああ、そう。大会、来ると、なんか、手伝ってましたよ。

鈴木 へえ。

芦刈 その一、全国大会とか九州大会の。

鈴木 はい、はい、はい。

芦刈 来ると、あの、掛け持ちでやってたんで。こう、何年後に大分に来るからって話で、その前から準備したりしてましたけど。

鈴木 でも、まあ、基本的に、協会は、親の、親が結構、中心にやってたってことですね？

芦刈 うん。ほぼ、親がやってたね。

鈴木 うん。今、その病棟の親の会ってあるんですか。

芦刈 いや、今、ないです。

鈴木 それも同じ、ご、時期ですか、なくなったのは。

芦刈 あの、ずっと自治会より、は、早くなくなりました。

鈴木 へえ。

芦刈 うん。

鈴木 うん、ということは2012年とかよりも前？

芦刈 そうですね。うん。

鈴木 はあ。それ、どうしてなくなったんですか。

芦刈 いや、まあ、その一、会長をやる人が、だんだん、いなくなって。そんなに動けないし、みたいにいってって、その頃、いつも、やる人が決まっていたので。

鈴木 ああ。

芦刈 何人かの負担になるので。

鈴木 はい、はい、はい、はい。

芦刈 で、もう、あの、解散になっちゃった。

鈴木 ふうん。

芦刈 なんか、もう、まとめて、こう、病院に、なんか、意見するとかいうことが、支部で
しかなかったの。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。ちょっと、なんか、やっぱ、言うのが弱くなったかなって。

鈴木 ああ。なんかその一、なかなか言えないってということで、なんか、ふ、ふ、不利益つ
ていうか、なんか、問題になることってありましたか。

芦刈 まあ、ほぼ、言われたとおりになっちゃいますね、病院。うん、うん。

鈴木 うん。で、あの、さっき、おっしゃってたアルコールっていうのが、あの一、で、あ、
飲めなくなったっていうのは、いつ頃だったんですっけ？

芦刈 それも自治会、なくなってからです。

鈴木 それと関係してるんですか、なんか。

芦刈 自治会のときにだけ、行事のときだけなの。

鈴木 ああ。あ、と、ということ・・・。

芦刈 普段、病室で飲んだら駄目なんです。

鈴木 ああ、なるほど。

芦刈 うん。一応、病院内でアルコールは厳禁なんで。うん。

鈴木 そういうことですか。え、ということは、その、じ、じ……。

芦刈 いや、か、隠し持って、飲んでた人はいますよ。

鈴木 ハハハハハ。フフ、フフ。

芦刈 うん。うん。

鈴木 今でもいるんですか、そういう人は。

芦刈 今は、そんな元気な人はいないですね。

鈴木 ああ、逆にね。うん。

芦刈 その人が亡くなる時、あの一、引き出しから焼酎が、ごろごろ出てきたって。フ、フ。

鈴木 フフ、フフフフ。あの一、その一、要するに自治会がなくなったことで、その、夏祭り行事とかも、なくなったっていうことですか。

芦刈 あと、まあ、病院がやり始めたんですけど、もう、あの一、やる、病院の中のやることが限られてて。まあ、人を、行事、人を呼んだりとかするのに、ちょっとやってんだけど、で、だんだん、呼吸器も増えて、ホールに集まれなくなった。しかも、病棟でするようになって、本当に、あの、なんか、僕たちにとっては、ちょっとつまらなくなって。ちょっと物足りないなって。

鈴木 ああ。やっぱ、違いますか。

芦刈 来てから、なんか、指導室の人たちに踊ったりは、し、したり、なんか、歌ったりするだけで。ガキ入れると年齢的にどうなんだって思ったりはします。ちょっと重心寄りかなっていうときもあります。もう、この病棟になってから、本当に。僕ね、自分で、やっぱ、やってて楽しかったんで、そういうイメージがあるので、やっぱ、た、面白くねえなっていう。

鈴木 フフ、フフフフフ。

芦刈 で、なんか、いつも、やることが似たようなことばかり、やってるんで。

鈴木 ああ。

芦刈 全部、自分たちで企画してたんで。うん。

鈴木 今は、じゃあ、療育指導室の人がやってるんですか。

芦刈 そうですね。けど、何も期待してない。

鈴木 フフフフフ、フフ、フフ。

芦刈 申し訳ないけど、頑張ってくれてると思うんですけど。

鈴木 療育指導室って、何人ぐらい、職員いる、いるんですか。

芦刈 一応、昔は、保育士2名に、指導員1名だったのが、今年、ちょっと、やり方が複雑で、なんか、い、1階から5階まで、ちょっと、担当してる人が、ばらばらで。人によっては、違う保育士さんが来ます。

鈴木 へえ。

芦刈 なんか、うん、本人たちも、ややこしくて、なんか、戸惑ってるみたいですけど。

鈴木 フフフ、フフ。じゃあ、その・・・。

芦刈 なんか、こう、用事とか頼みにくいですよ、逆に。

鈴木 ああ。

芦刈 なかなか、つかまらずに、事前に予約しとかんと、なかなか無理。

鈴木 予約。

芦刈 あ、あの一、この日に、ちょっと片付けしてとか。うん。なるべく、日、決めて、その人の所に、担当の人ん所に来るようにはしてるみたいですけど、なかなか忙しいみたいで。

鈴木 でも全体として、指導室の人って3人ぐらいしかいないってということですか。

芦刈 いや、人数的には、あ、でも、各病棟2人ずつもないぐらいで、ちょっと大変かな。ちょっと人数、減ってるので。

鈴木 ああ。

芦刈 でも病院は増やす気ないみたいなので。

鈴木 はい、はい、はい。え、各病棟2人ってというのは、1階、2階、3階、4階、5階ってということですか。

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ。

芦刈 確実にいたんですけど、1から、1から4までを2人ずついたんですけど、入ってくる人もいないし。

鈴木 ああ。

芦刈 で、あの、転勤とかで、その後、補充もなかったりとか。

鈴木 ああ。あ、そうか。5階は一般だから、1階から4階までなんですね、一応。

芦刈 そう。で、5階が、ちょっと、療養介護が少し入ってるので、そこにも、ちょっと行かないといけなくなって。

鈴木 へえ。

芦刈 いや、その一、指導室をなくしたいのか、よく分からないですけど、その割には、あの一、リモート面会とか、そういうことは、全部、指導室に丸投げでやらせてるので。

鈴木 なるほど。

芦刈 大事な部署だと思うんですけど。

鈴木 ですよ。

芦刈 なんか、どんどん生活しにくくなる。

鈴木 ああ。

芦刈 い、一般の病院になってきとる気がします。

鈴木 あ、一般の病院みたいになってきてる？

芦刈 うん。療養介護じゃなくなってきた感じですよ。

鈴木 あ、なるほどね。

芦刈 うん。意識も、なんか、変わってきてるのかなと思う、職員。

鈴木 あ、そうですか。

芦刈 うん、うん。

鈴木 うーん。あの一、たばこは、もちろん駄目ですよ？

芦刈 そうですね。一応、喫煙外来とかを、や、禁煙外来ね、禁煙外来もやってるので。

鈴木 え、吸ってる人っているんですか、患者さんで。

芦刈 いや、ちょっと前までいましたけど。

鈴木 へえ。じゃあ、認められてることは認められてる。

芦刈 はい、いや、本当はいけないんですけど。

鈴木 本当は、いけない。

芦刈 あ、その一、公には。やっぱり禁煙外来やってる所なんで。

鈴木 ああ、ああ。

芦刈 うん。何人かはいましたね。

鈴木 まあ、一応、ばれないように吸ってるっていう。

芦刈 でも、もう今、撤去されました、全部。

鈴木 ああ。かつては・・・。

芦刈 もう今、吸う人、いませんけど。うん。

鈴木 かつては、じゃあ、あの、看護師さんも知っておきながら、す、吸ってる人もいたっていうことですか。

芦刈 だって、看護師さんが吸ってるんだから。

鈴木 あ、看護師さんも吸ってた。

芦刈 そこで一緒に。

鈴木 あ、へえ。え、それ、いつ、いつまでの話ですか。そういうことがあったって。

芦刈 いつまでやろう。4、5年前かな。

鈴木 あ、結構、最近まで。

芦刈 うん。

鈴木 つまり、新病棟に移ってから、そういう人がいたんですね？

芦刈 いましたね。うん。

鈴木 へえ。なんか、あれですね。看護師さんによっては、結構、そうやって寛容な人もいるんですね。

芦刈 まあ、そうですね。

鈴木 原則……。

芦刈 昔は、昔は、結構、そういう、ちょっと、柔軟な人、いたんですけど、今、もう、厳しいですね、いろいろ。

鈴木 ああ、今は厳しい。

芦刈 もう、上からの命令ですって言われる人もいるし。

鈴木 へえ。じゃあ、む、昔は、じゃあ、原則、駄目だけど、なんか、認めてくれる人もいたってということですか。

芦刈 まあ、ね、うん。き、一応、禁止ではなかったの。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。僕は絶対、吸わないです。

鈴木 うん、うん、うん。

芦刈 うん。

鈴木 あのー、夜、寝る時間って決まってるじゃないですか、20、9時でって。

芦刈 はい、はい。

鈴木 紅白歌合戦って見れなかったんですか。

芦刈 が、そ、そのときだけ、特別、見せてもらいます。

鈴木 あ、それは、じゃあ、全員、OK なんですネ？

芦刈 うん。見たい人は。

鈴木 ああ、ああ、ああ。

芦刈 なんか、もう、きょうは特別でって、言ってくれて。

鈴木 へえ。

芦刈 前は、あの一、ワールドカップのサッカーとか、オリンピックのときも、人によっては見せてくれてたんですけど、今、もう、ちょっと厳しいみたい。

鈴木 え、今は駄目なんですか。

芦刈 今、駄目ですね。

鈴木 え、今って、結構、オリンピック、東京オリンピックも、夜までやってますよね？

芦刈 うん。でも、うん、1人、患者さんが見たいって言ったけど、駄目だったみたいです。

鈴木 フへへへ、へへ。そうなんですか。

芦刈 で、勝手に見てたら、見つかって怒られたみたい。

鈴木 フフフフフ、フフ、フフ。

芦刈 その子、サッカーが好きで、日本代表の試合、見たかったみたいなんです。

鈴木 ああ。夜、遅くまでやりましたよね。

芦刈 うん。まあ、あの一、最後の3位決定戦、時間がずれたので見れたんですけど。

鈴木 ああ。

芦刈 18時からになったので。

鈴木 そうですね。でも、まあ、あれですか。やっぱり厳しくなっちゃったんですね、じゃあ。

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ、ああ。

芦刈 昔は、もう、見ていいよって言ってくれてたんですけど、今、もう、上、上から言われてるんで、で終わる。

鈴木 ああ。え、上からっていうのは、どっからですか。看護師長ですか。

芦刈 か、まあ、なんか、よく分かんけど、病棟か、上か、もっと上なのか。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。

鈴木 えっと、なんか、でも看護師さんによっては、なんか、う、何ていうのかな、あの一、親切にしてくれる人も、柔軟に対応してくれる人もいたってということなんですか？

芦刈 そうですね。

鈴木 ああ。

芦刈 前は、見ていいよって言ってくれた人もいたんです。

鈴木 うん。

芦刈 けど、ちょっと、もう、時代が変わったから。うん。

鈴木 あと、あの、入浴の時間って月曜日と木曜日だと思うんですけど、もっと入りたいとかって思いますか。

芦刈 が、思いますけど、ちょっと無理だと思いますよ。

鈴木 無理なんですね。

芦刈 だから、風呂の状況、見てるので、僕たちも。

鈴木 ああ。

芦刈 あの、9時から始めて5時までかかること、あるので。

鈴木 はあ。

芦刈 うん。それを見てたら、言えないです、職員に。けど、うち、まだ、いいほうなんですよ。2回、入れる。

鈴木 ああ、そうですか。

芦刈 違う、お、上の2階とか、もう、週1回ですよ、今月より。

鈴木 ええ。

芦刈 うん。うちだけ、まだ、やってくれてるんですけど、それだけでも、ありがたい。

鈴木 え、筋ジス病棟でも、2階の場合は1回なんですか。

芦刈 そうですね。あの、呼吸器、着けとる人は。

鈴木 でも、芦刈さんも呼吸器、着けてますよね？

芦刈 うん。でも、うちは、まだ、それでやってくれてる。

鈴木 はあ。え、あの、1階のほうが少ないんですか、呼吸器、着けてる人って。

芦刈 いや、うちのほうが、入る人、多いと思います。

鈴木 へえ。

芦刈 ほとんど、全員、入るので。

鈴木 あ、えっと。

芦刈 だから、2階、2階とかは、いち、あ、1週間に1回しか、みんな。呼吸器とか、ちょっと入らるので、そ、こういうのは、すぐ終わるみたいなんです。

鈴木 それは、ど、それは、どうして、そんな違いが出るんですか。

芦刈 いや、もともと、うちも呼吸器の人、少ないときは、呼吸器の人は1回だけってなっていたんですけど、ある日、なんか、病院から、週2回、入れろっていう、なんか、お達しが来て。それで、週2回、入れますけど、どうしますかって聞かれたんで、僕たちは、入りますって言ったんですけど。

鈴木 フフ、フフフ。

芦刈 僕たちが言ったわけじゃないんですよ。病院から言われたんで。

鈴木 ああ。

芦刈 まあ、僕たち、入れたほうがいいので。それは、もちろん、OKしますよね。

鈴木 うん、うん。

芦刈 うん。けど、いまだに、それを続けてくれると思うと、ありがたいちゃ、ありがたいよって。うん。

鈴木 ああ。で、もっと入りたいっていうことなんですね？ でもね、本音は。

芦刈 あ、もちろん。頭とか、かゆいんで、やっぱり。

鈴木 で、ですよ。

芦刈 仕事してるので。

鈴木 夏場もきついんですよね？

芦刈 そうですね。

鈴木 あの、どうして2階の人は。なんか、違いがあるんですか。2階と、あんまり交流ないんですか。

芦刈 いや、まあ、あんまり、ないですけど。2階は、あの一、き、気管切開してる人が多いかな、うちより。けど、うちも多いですけど。うん。女性が多いのもあるのかな。

鈴木 ああ、なかなか言えないってことですか。

芦刈 女性のほうが、なんか、お風呂、入るの、いろいろ大変みたい。

鈴木 あ。

芦刈 頭とかも、こう、髪、長かったりとかする、その違いもあるのかな。

鈴木 でも、対応が違うっていうのも、なんか変な話ですね。

芦刈 うん。

鈴木 うーん。

芦刈 だから、僕たちも統一されたら困るんで、何も、い、言ってないです。

鈴木 フフフフ、フフ、フフ。

芦刈 フ。

鈴木 退院された後は、じゃあ、どうされるんですか。あの一、やっぱり、お風呂、毎日、入りたいっていう感じですか。

芦刈 いやあ、でも一応、退院しても、月、木で、今、考えてます。

鈴木 ああ、そうですか。

芦刈 で、頭だけ、あの一、洗うやつ、あるじゃないですか。ブ、プールみたいになってて、それに頭入れて洗うやつ。あれ、買ったんで、頭だけ洗えたら洗おうかなって。

鈴木 それ、あの、介助者の人に、入浴介助ですか。

芦刈 そうですね。

鈴木 はあ、はあ。

芦刈 一応、お風呂、入るときは、訪看さん、来たあたりにやろうかなと思って。

鈴木 あ、なるほど。じゃあ、訪看さんとヘルパーさんが、い、いるときにやるんですね？

芦刈 うん、うん。

鈴木 はあ、はあ。

芦刈 で、あの、毎日、入ると、僕も疲れるんで。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。週2回でも十分だな。

鈴木 うん、うん、うん、うん、うん。

芦刈 別に、毎日、入りたいって言えば、それはできますけど、自分も、そればかりに時間が食われるのも嫌かなって。うん。

鈴木 ちなみに、お風呂の入る時間って、病院は、何時、何分ぐらいなんですか、芦刈さん、お一人で。

芦刈 いやあ、どうやろう。服まで着替えて、30分。

鈴木 30分。

芦刈 うん。

鈴木 で、シャワーの時間は、どんぐらいですか。

芦刈 いや、全部、含めてです。

鈴木 じゃあ、シャワー自体だったら、10・・・。

芦刈 入って、洗って、最後、服、服、着て。

鈴木 ああ。シャワー、シャワーやってる時間って10分ぐらいですか、じゃあ。

芦刈 10分もやってないかな。

鈴木 あ、10分もやってない。

芦刈 実質、だって、洗って、お湯、掛けて、まあ、15分ぐらい。うん、ですね。

鈴木 まあ、シャワーでも別にいいのかなって感じなんですかね？ 芦刈さんは、その、お風呂とかじゃなくて。

芦刈 まあ、あの、冬場は、ちょっと寒いときがありますけど。

鈴木 そうですよ。

芦刈 僕は別に問題ないかな。

鈴木 ふうん。あと、あの、なんか、前、おっしゃってた、その、今、その、外泊すると、5日間まではOKだっていう話、されてましたよね？

芦刈 はい、はい。

鈴木 それって、いつから、そうなったんですか。

芦刈 え、いつからだろう。随分、前ですけど。

鈴木 子どもの頃って、結構、1カ月とか戻ってましたよね？

芦刈 そうですね。

鈴木 ですよ。

芦刈 な、夏休み、夏休みとか。

鈴木 夏休み、ずっととかね。

芦刈 うん。

鈴木 じゃあ、あの一、卒業した後ぐらいですか、大人になってから。

芦刈 あ、そのときは、うん、それぐらいやったかもしれない。

鈴木 ああ。

芦刈 今、そんなに帰る人もいなくなった。

鈴木 ああ、なるほどね。でも、まあ、5日っていうのは、もう、決まってるっていうことなんですね？

芦刈 そうですね。退院扱いになります。

鈴木 ああ、なるほど。あの、病院を、こう、勝手に、こう、出してしまう人っていませんでしたか、今まで。

芦刈 じゃあ、脱走する人？

鈴木 はい。

芦刈 ああ。病棟から、ちょっと、で、出たとかいう人は、い、いるけど、そこまでは出た人を聞かないですね。

鈴木 あ、そうですか。

芦刈 そこまで、みんな、外に出て、坂、下りれるほど、元気がなかったの。

鈴木 うん、うん、うん、うん。ああ。あの、その、病院にいと、その、誰かが、こう、亡くなるっていうことって、結構、多いんですか。

芦刈 うん。それは、もう、しょっちゅうです。

鈴木 しょっちゅう。1年に何回ぐらいですか。

芦刈 まあ、その、ないときは全くないですけど、重なるときって、結構、3人とか4人とか、なんか、そういうの、続くんですよ。

鈴木 へえ。

芦刈 通常、まあ、体調、悪い人が重なることはあるんですけど。

鈴木 はい、はい、はい。

芦刈 最近は、まあ、年に1回ぐらいですか。やっぱり、患者さんも知らない人が多いんで。

鈴木 ああ。

芦刈 うん。昔からいる人は知ってますけど。

鈴木 はい。

芦刈 なんか、それは、何回も僕も、うん、そういうことには遭ってますよね。

鈴木 なんか、そういう、あの、経験って、普通、普段、われわれの生活では、ないと思うんですけど、ど、どんな感じなんですか。

芦刈 いや、あの一、最近は全然、まあ、情報も、もらえないので、どうなってんのか分かんない。亡くなっても、別に報告されたりとかないので。

鈴木 ああ。

芦刈 そう、今、あの一、個人情報厳しくて、そういうのも全部、葬儀場とかも教えてくれない。

鈴木 はい、はい、はい。

芦刈 直接、家族に電話して聞くしかない。

鈴木 でも、かつては、そういう、身近に亡くなる人がいて。

芦刈 そう。それ、あの、自治会でも、あの一、うん、香典、出したりとかしてたので。弔電、打ったりとか。それぞれ、連絡してくれてたんですけど。

鈴木 うん。

芦刈 で、昔は、その一、ちょっと、亡くなる前に、ちょっと、顔、見てあげてとかいって、亡くなった後も、あの、で、呼んでくれたんですけど、それも今じゃ、ほとんどないので。

鈴木 その、誰か……。

芦刈 ベッドがなくなったら、そうなのかな、みたいな。うん。

鈴木 でも、それ、精神的に、なんか、こたえたりしませんか。

芦刈 いや、もう、最初の頃っていうか。まあ、慣れることはないんですけど。後輩とかは、本当、衝撃でしたね。うん。いや、まあ、後輩が亡くなっていくのは、ちょっと、つらいです。うん。まだ、はええやろうって。

鈴木 でも、そういうときって、なんかこう、心理的にサポートしてくれる人って病院の中にいらっしやいませんでしたか。

芦刈 もう、特には。

鈴木 うん。

芦刈 一応、精神科のドクターもいるけど、そんなに利用してる人は、いない気がする。

鈴木 でも、なんか、まあ、自分で、もう、何ていうのか、対応するしかないってことなんですかね？

芦刈 そうですね。みんな、あんまり、もう、口に出したりしないので分かんないですけども。それぞれ、やっぱり思うところはある。

鈴木 なんか、そういう思いを共有したり、話したりする機会は、なかったってことなんですかね？

芦刈 あまり話さないですね。

鈴木 ああ。逆にね。

芦刈 それぞれが静かに心の中で見送るみたいな感じですかね。

鈴木 それ、芦刈さんとしては、それでよかったかなと思います？

芦刈 まあ、どうですかね。その辺のところ、積極的に話す人もいないし、どうなのかな。うん。まあ、そ、その人の話を、ちょっと、昔話とか、そういうのは、してもいいかなと思うんですけど。うん。

鈴木 あと、あの一、リハビリとかって病院の中でやったりとかするんですか。

芦刈 やってますよ。

鈴木 それは、今でもそうですか。

芦刈 うん。今でも、病棟に、一応、来てくれます。

鈴木 週、何回ですか。

芦刈 あの、僕ね、一応、OT と PT と ST、全部、受けてるので。まあ、OT と、え、ST は、週1回、あと、PT は3回ぐらいしてます。

鈴木 何時間ぐらいですか。

芦刈 まあ、40分ぐらい。あの、2単位で。1単位が20分で、これを大体、2単位で40分ぐらいです。

鈴木 内容的には、どんな感じですか。

芦刈 あのー、PTは、あの、理学療法なんで、あのー、ストレッチとか、あのー、ちょっと痛い所に、あのー、うん、電磁波、当てて治療するやつとか、僕はやってますけど。OTも、まあ、ストレッチとか、あと、この、マウスの、あの、手の、セ、セッティングの道具とか、そういうのを作ってくれたり。STは、もう、言語士、言語聴覚士の人が、まあ、え、嚙下の、が良くなるための体操。口の運動とか発声練習とかしてます。

鈴木 それは必要なものを受けてられるなって思いますか。

芦刈 あ、自分で、一応、こういうのをしたいって言う、言うので、それは大丈夫です。

鈴木 あのー、子どもの頃も、そういうリハビリってやってらっしゃいましたよね？

芦刈 ああ、やってましたよ。

鈴木 それ、学校のプログラムとして、やってたってということですか。

芦刈 いや、学校は関係ない。

鈴木 あ、学校は関係ない。病院の中のプログラムとしてやってた？

芦刈 そうですね。僕は、あんまり好きじゃなかったんで、サボってましたよ。

鈴木 何が好きじゃなかったんですか。

芦刈 え、リハビリ自体が。

鈴木 ど、どん、どんな内容だったんですか。

芦刈 ああ、まあ、そのー、起立訓練とか、結構、きついやつだったので。まあ、今なら、

ちょっと真面目にやったと思うんですけど、その、と、当時は、やる意味も分かってなかった。

鈴木 じゃあ、今は、もう、う、積極的にやってらっしゃるってことなんですか？

芦刈 そうですね、うん。

鈴木 それは退院された、が、後もやる予定なんですか、リハビリは。

芦刈 いや、もう、月1回、今の病院で受けようと思ってる。

鈴木 おお。じゃあ、回数は減るんですね、だいぶ。

芦刈 うん。訪問っても思ったんですけど、なかなか見つからなくて。

鈴木 ああ。

芦刈 まあ、どうしても必要になったら、どっかに頼もうかな。

鈴木 ああ、それは、ちょっと不安ですね。ふうん。ありがとうございます。もう、ちょっと、3時ぐらいになったので、ちょっと、この辺りで切り上げようと思うんですけど。あの一、来週ですよ？ 8月の17日ですもんね？

芦刈 はい。

鈴木 あの一、無事に退院が行われることを祈ってますので。

芦刈 はい。ちょっと、あ、雨みたいなんで。

鈴木 ですよ。ちょっと心配ですね。

芦刈 うん。心配ではあるんです。

鈴木 あ、ちょっとまた、しばらくたってから、退院した後の様子とか、お伺いしたいと思うんですけど、大丈夫ですかね？

芦刈 はい、うん。

鈴木 まあ、多分、2週間とかですかね？ やっぱり、慣れるの。

芦刈 ちょっと、ネ、ネット環境がどうなるのか。

鈴木 ですね。

芦刈 すぐ、できればいいんですけど。

鈴木 ああ。また、じゃあ、あの一、1週間ぐらいたったら、ちょっと連絡させてもらいたいと思いますので。多分……。

芦刈 連絡が、連絡、なかったら、だから、ネット環境が整ってないと思ってください。

鈴木 分かりました。多分、9月、来月になって、ちょっと、大分を訪問しようかなと思っていますので、そのとき、よろしくお願いします。

芦刈 はい。分かりました。

鈴木 はい。すいません。きょうは、ありがとうございました。あの、退院、無事に済まされて、あ、成功されることを、心からお祈りしていますので、よろしくお願いします、引き続き。はい、失礼いたします。

芦刈 はい、失礼します。

(了)